

日本鼓篋

三府膝

栗毛

三編

松村櫻雨著

松島吟光画



島鮮 鼓篋

65  
60  
55  
50

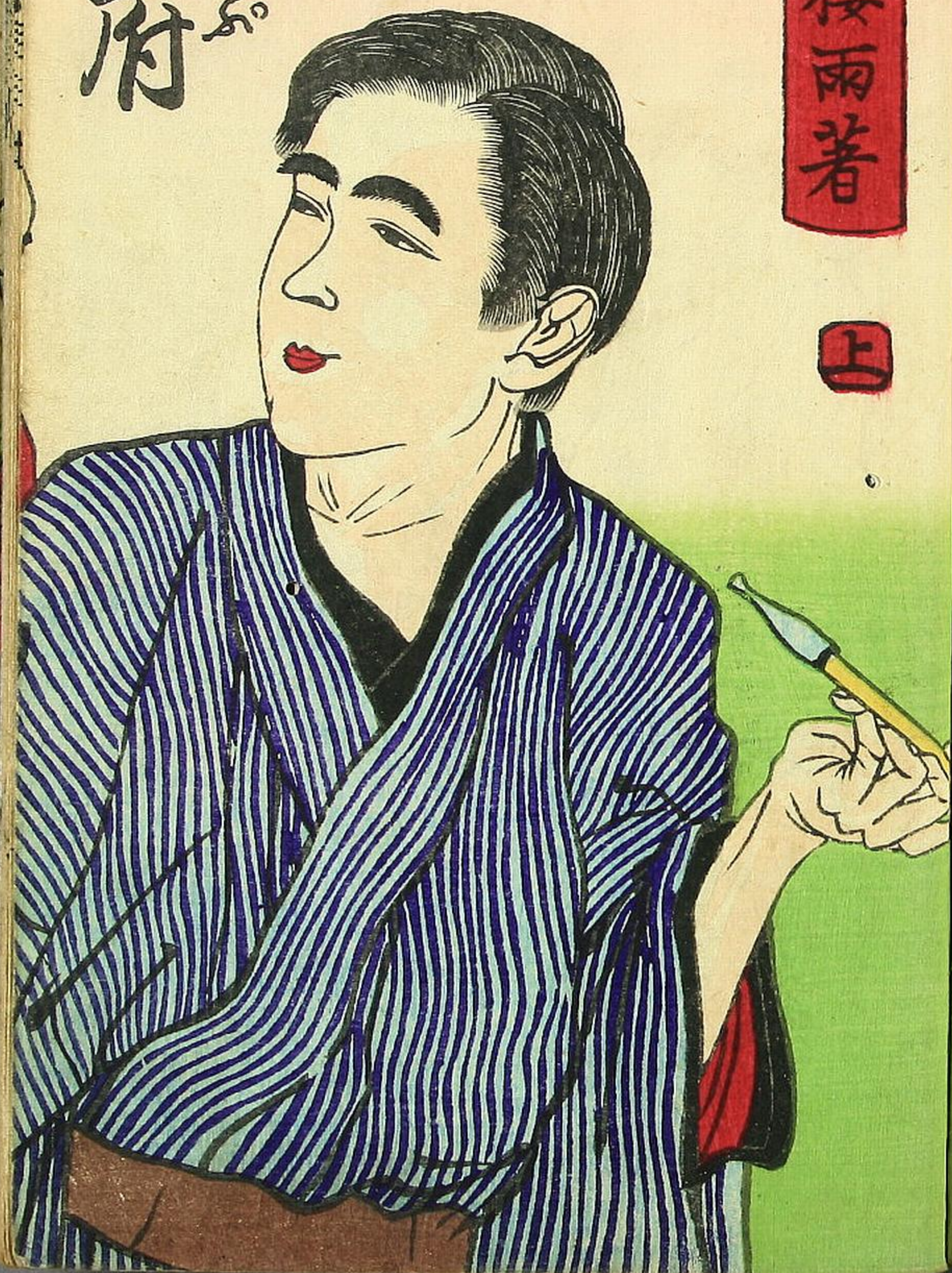
府ふ

三さん

鼓腹こく  
穿く平へい

松村櫻雨著

上



A786  
32

三府

膝栗毛

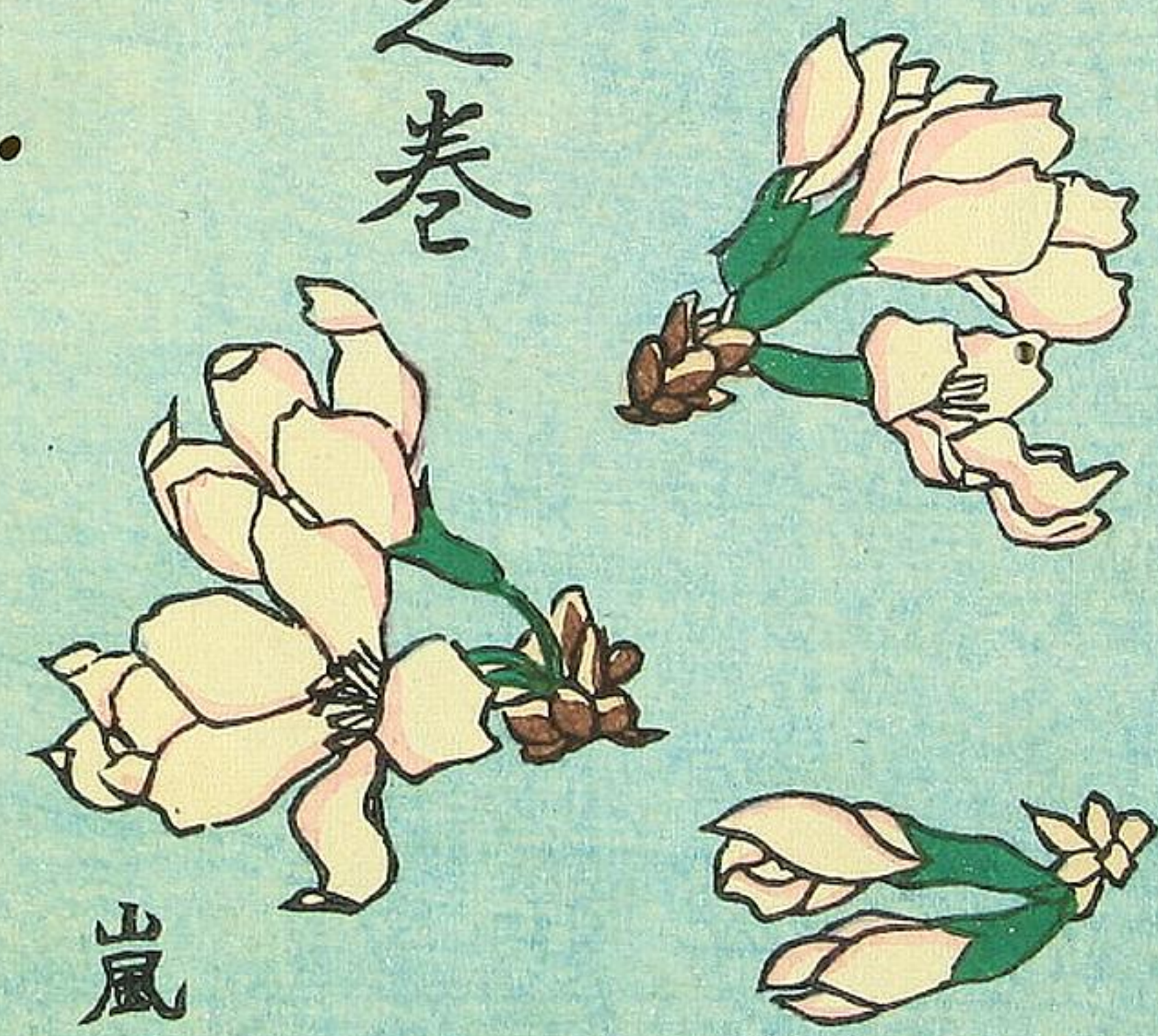
三編

上之卷

松村櫻雨著

松齋吟光畫

島鮮堂寿梓



嵐山

298-8389

一九が飛せし膝栗毛の京大坂の立場も長く繫ぎし  
 滑稽の假令明治の今日でも其尻馬と看官の  
 所笑草めたるまの遠慮と趣向と巡らして漸く  
 筆と鳥が啼く東男の二乃舞もあざれ當り此梓弓  
 引手許多の御愛顧と蒙り度と慾の度千枚張りのあき  
 日に先三編終稿成とヤウ下済して是より涼し心風也  
 御具肩とひさす仰き栗めたる

明治十四年七月稿成

櫻雨迂生戲識



栗三三十一



東山

宿屋

図七

東山

東山

清水

面次郎



鼓腹 三府 栗毛 第三編

東都 松村櫻雨 戯著

倭<sup>わ</sup>て西<sup>にし</sup>次<sup>じ</sup>島<sup>しま</sup>居<sup>い</sup>る公<sup>こう</sup>のあ個<sup>こ</sup>ハ件<sup>けん</sup>の流<sup>りゅう</sup>氷<sup>ひょう</sup>糸<sup>いと</sup>糸<sup>いと</sup>とつ<sup>とつ</sup>而<sup>り</sup>有<sup>あ</sup>り海<sup>うみ</sup>  
 上<sup>かみ</sup>小<sup>こ</sup>柳<sup>りゅう</sup>ハ浪<sup>なみ</sup>小<sup>こ</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>異<sup>い</sup>る<sup>る</sup>海<sup>うみ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>て<sup>て</sup>屋<sup>や</sup>敷<sup>しき</sup>の<sup>の</sup>海<sup>うみ</sup>  
 の年<sup>とし</sup>前<sup>まへ</sup>八<sup>はち</sup>回<sup>かい</sup>津<sup>つ</sup>戸<sup>と</sup>の港<sup>みなと</sup>小<sup>こ</sup>島<sup>しま</sup>小<sup>こ</sup>島<sup>しま</sup>ハ<sup>ハ</sup>津<sup>つ</sup>戸<sup>と</sup>の海<sup>うみ</sup>岸<sup>ぎし</sup>ハ<sup>ハ</sup>東<sup>とう</sup>海<sup>かい</sup>の<sup>の</sup>横<sup>よこ</sup>  
 濱<sup>はま</sup>小<sup>こ</sup>島<sup>しま</sup>異<sup>い</sup>る<sup>る</sup>ハ<sup>ハ</sup>一<sup>いち</sup>軒<sup>けん</sup>新<sup>しん</sup>築<sup>くわく</sup>の<sup>の</sup>間<sup>ま</sup>け<sup>け</sup>た<sup>た</sup>る<sup>る</sup>條<sup>じょう</sup>約<sup>やく</sup>と<sup>と</sup>港<sup>みなと</sup>の<sup>の</sup>一<sup>いち</sup>個<sup>こ</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>ハ<sup>ハ</sup>そ  
 の<sup>の</sup>繁<sup>さか</sup>盛<sup>さか</sup>い<sup>い</sup>ち<sup>ち</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>弓<sup>ゆみ</sup>の<sup>の</sup>海<sup>うみ</sup>系<sup>けい</sup>に<sup>に</sup>押<sup>お</sup>出<sup>で</sup>る<sup>る</sup>松<sup>まつ</sup>原<sup>はら</sup>ハ<sup>ハ</sup>和<sup>わ</sup>田<sup>でん</sup>  
 の<sup>の</sup>み<sup>み</sup>さ<sup>さ</sup>れ<sup>れ</sup>乃<sup>な</sup>風<sup>かぜ</sup>系<sup>けい</sup>よ<sup>よ</sup>向<sup>むか</sup>へ<sup>へ</sup>名<sup>な</sup>小<sup>こ</sup>島<sup>しま</sup>小<sup>こ</sup>島<sup>しま</sup>摩<sup>ま</sup>耶<sup>や</sup>山<sup>さん</sup>の<sup>の</sup>末<sup>すえ</sup>路<sup>ろ</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>  
 船<sup>ふね</sup>が<sup>が</sup>け<sup>け</sup>揺<sup>ゆ</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>船<sup>ふね</sup>の<sup>の</sup>津<sup>つ</sup>面<sup>めん</sup>ハ<sup>ハ</sup>津<sup>つ</sup>路<sup>ろ</sup>津<sup>つ</sup>路<sup>ろ</sup>正<sup>ただ</sup>冬<sup>ふゆ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>運<sup>うん</sup>子<sup>こ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>  
 の<sup>の</sup>何<sup>なに</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>ま<sup>ま</sup>さ<sup>さ</sup>の<sup>の</sup>東<sup>とう</sup>海<sup>かい</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>き<sup>き</sup>な<sup>な</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>む<sup>む</sup>き<sup>き</sup>  
 海<sup>うみ</sup>の<sup>の</sup>浪<sup>なみ</sup>の<sup>の</sup>音<sup>ね</sup>ま<sup>ま</sup>ど<sup>ど</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>板<sup>いた</sup>面<sup>めん</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>板<sup>いた</sup>面<sup>めん</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>  
 二<sup>ふた</sup>個<sup>こ</sup>が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>一<sup>いち</sup>つ<sup>つ</sup>蒸<sup>む</sup>気<sup>き</sup>船<sup>ふね</sup>ハ<sup>ハ</sup>機<sup>き</sup>関<sup>かん</sup>の<sup>の</sup>音<sup>ね</sup>が<sup>が</sup>猪<sup>ぶ</sup>蹄<sup>てい</sup>の<sup>の</sup>音<sup>ね</sup>が<sup>が</sup>卸<sup>おろ</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>

つぎ 猫の始焼り  
 ハツと花七郎  
 波の花や敷  
 せねとく  
 浦来  
 るいりそをも  
 知見しはあひ  
 船あひくふ  
 茶客の始末  
 の  
 看つとあがり  
 行くふ面次

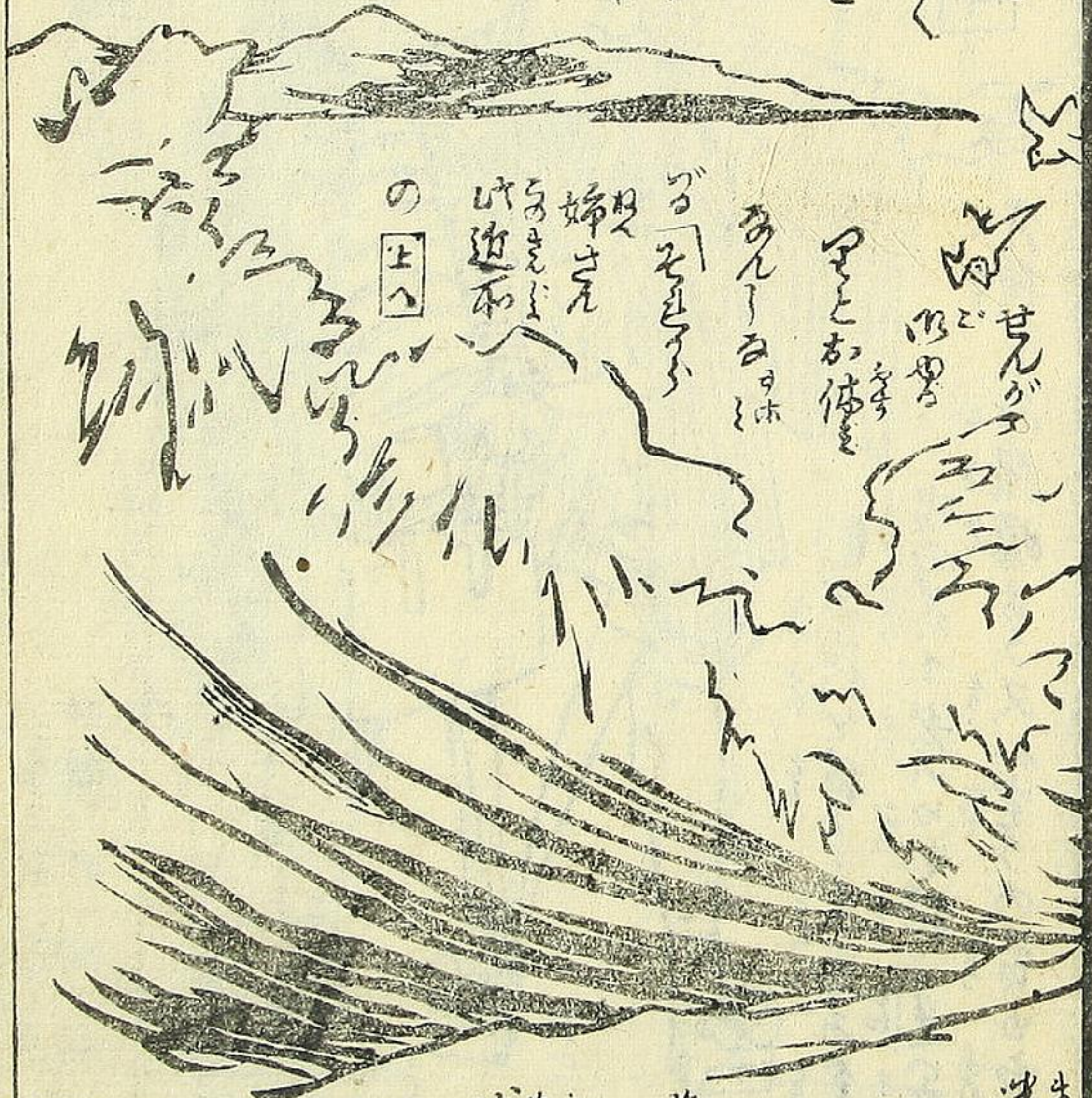
○めりそらおまうおまて  
 おます男「これく物やん  
 おおさんとあうおあま」  
 お連んうへる  
 お茶よあし  
 くれお糖やを  
 そまう  
 おあへさう  
 おあとおき  
 きんうアし  
 茶をさうり  
 んさうり

あつちの  
 茶をさうり  
 写えさる  
 茶盤と  
 面次郎  
 何たりくふ  
 家の男女  
 中寄へ店先へ逢ふ  
 おあか「お客よんよまきや  
 おあやすサアらあ人あうりあす」

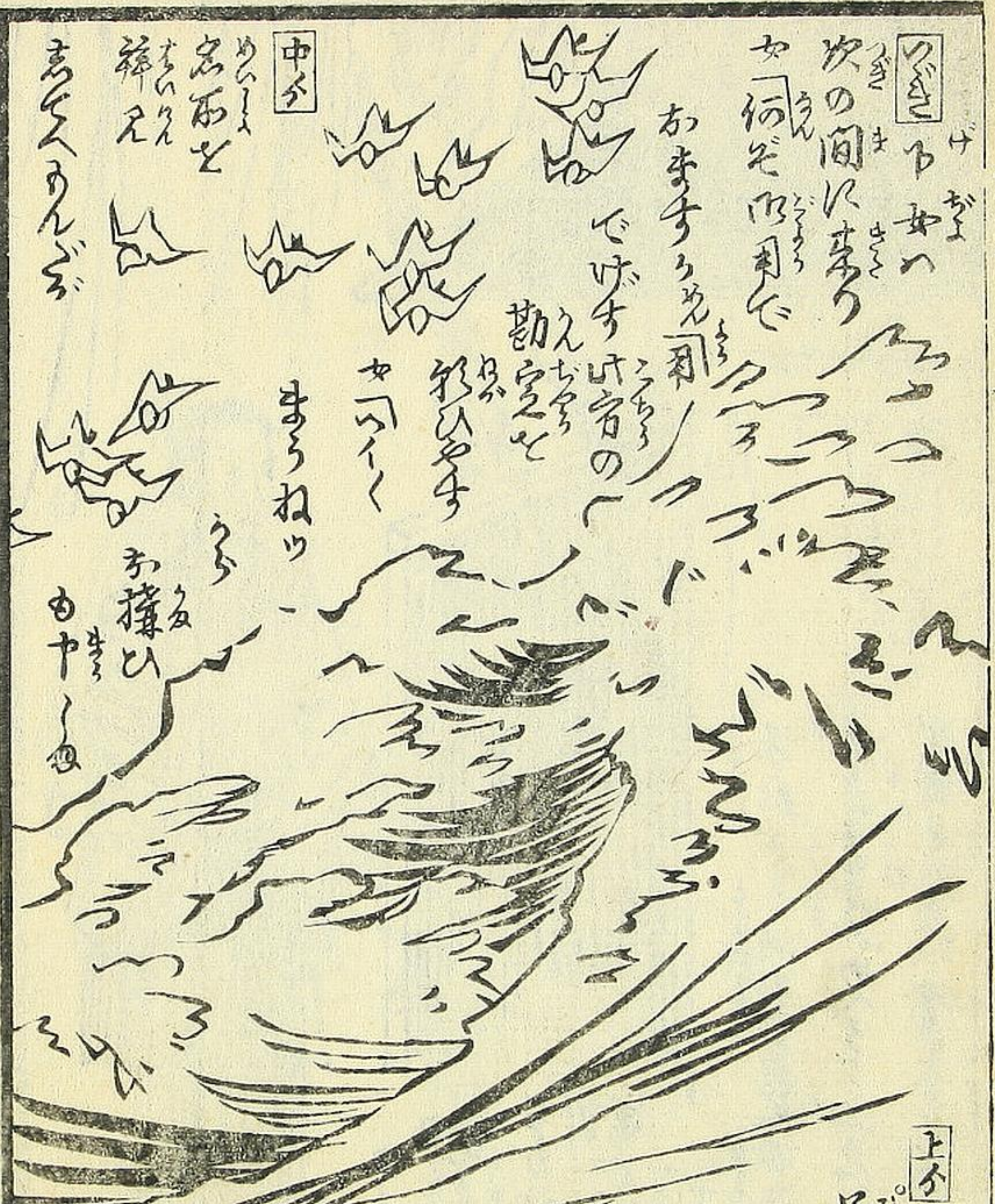
あや「ハイく  
 お二人さんあ  
 あのせつひ  
 あか女中  
 いかせ  
 持あう  
 の二橋とる  
 あひやく終り  
 船の食すあ  
 はまひをさあ  
 公何んど。あひをさす  
 あまへんうあああ



ざんと様ごうごふと  
 ぼせむせむるハイク  
 ア、林戸西のえんと  
 名取のおまさんか  
 清さんがよくおぼる  
 のい渡川の橋公社  
 生田の盛幸引  
 の蹴マアこんな  
 雨におまさんさ  
 那翁さんもおま  
 等とあうおんや  
 して福原の下へ



迷ひ  
 かの  
 あり  
 の山  
 滅法  
 次へ



上分 英君の家  
 品さんの居る  
 揚屋一おぼる  
 やす東条の  
 おまさん  
 以所等の  
 おまさん  
 もめ  
 そら天  
 幸に  
 去るころ  
 いまも

西条三三上

東条三三上

六

三

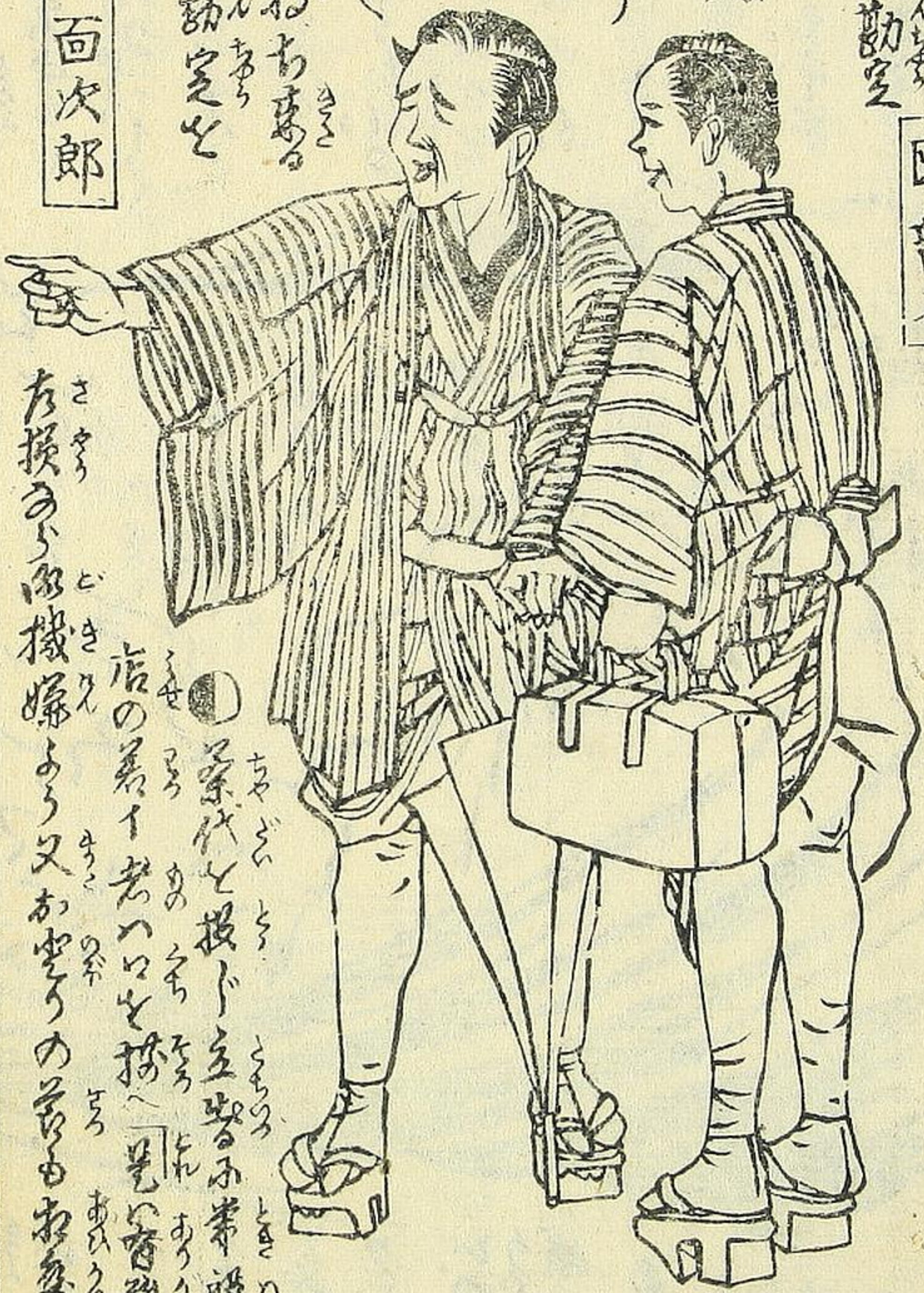


栗毛三郎

留七

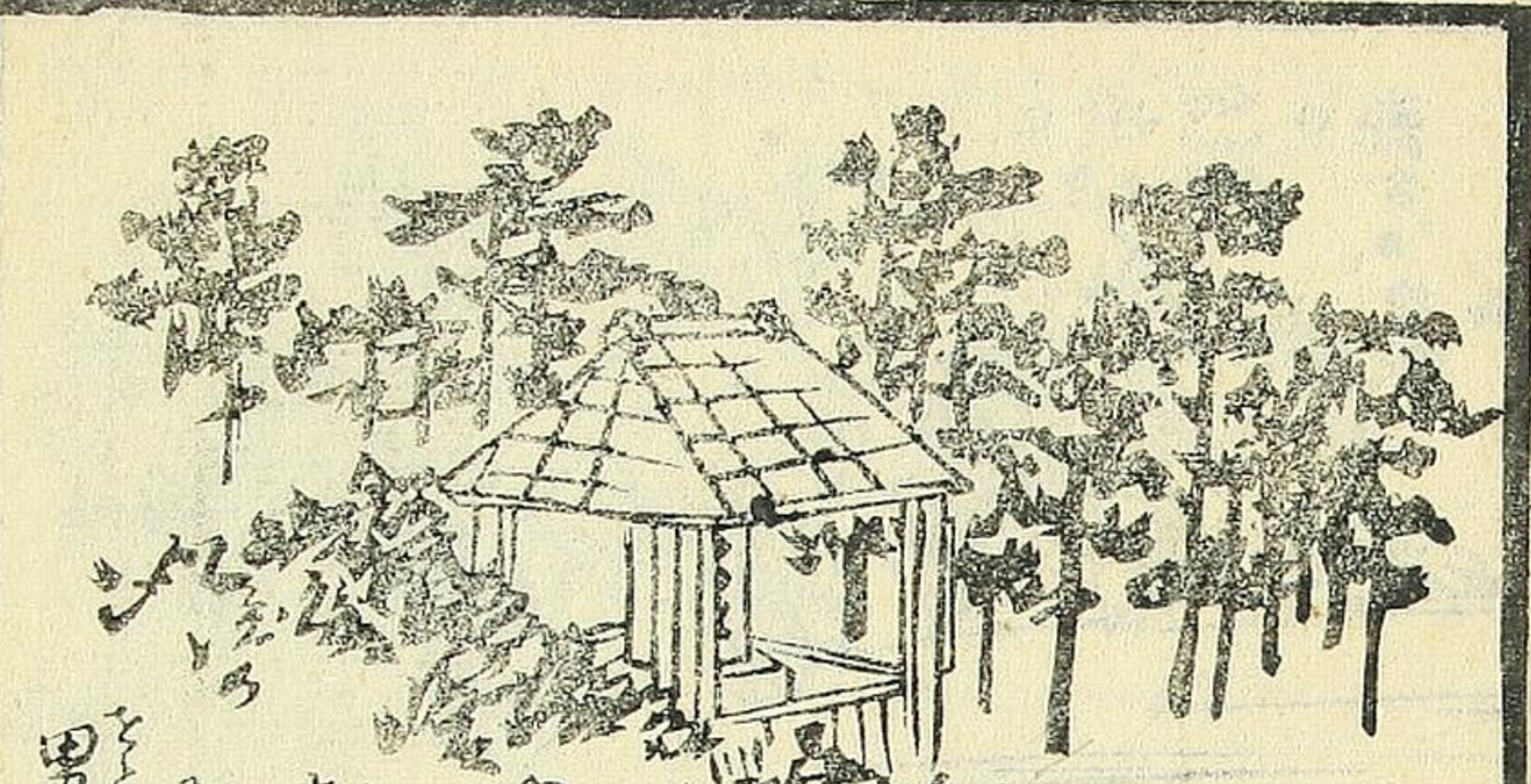
湊川神社

ついでに  
お姫さん勤王  
とあつてヨ  
おへい四今  
あて素  
あす  
店の方  
お姫様  
お付と持  
お二個ハ勤定と  
は織姫  
あ



● 素代と扱と主賢小帯盤の  
店の着イ老へのと扱一見の香籠ら  
左扱より扱様より又お空りの首もお夏り

面次郎



ませきへいおきんよううーとらふと容面よは流く  
まより狭たの約橋をお返り湊川神社の表門と  
右側の小松様まとのと鳴るお心揃子之葉と  
徳せしお碑あり中裏お明人兼お水の  
碑文と刻付より慈へ水戸の中柄を究因  
卿の建おおおありとまより持慶本社  
と依しお大門側の水築お小標おり  
● 別るおきんご一文を織の九まごらる  
あか補公と補公の事とけらすのま  
南朝の文忠臣と世家傑のサづりまよりま  
お極つて飛ぶお幸七立と石おあるとまお  
男かごのまよりおの故事と知らるおまご文の

次





芳川春壽岡本起泉綴

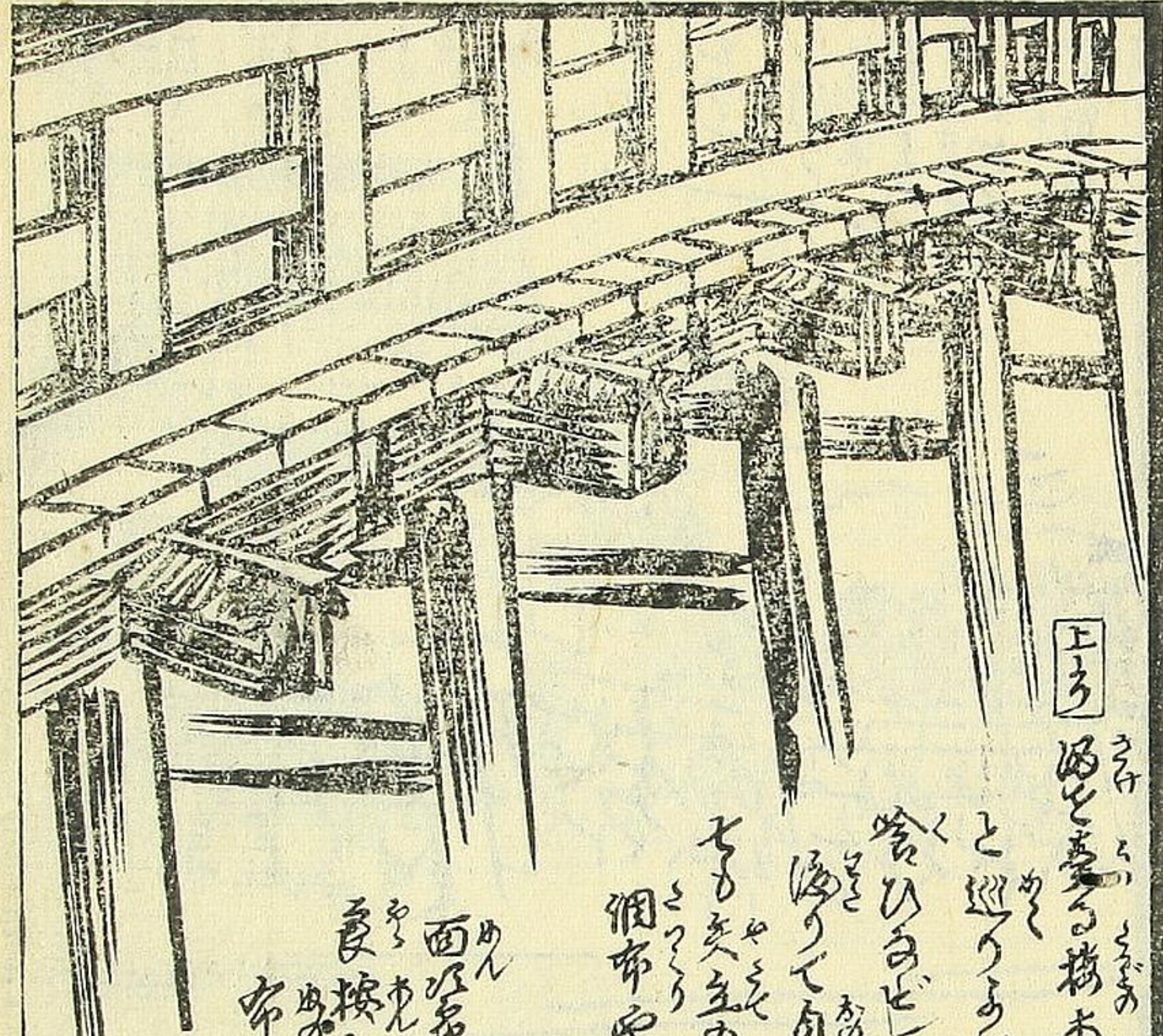
其名し高橋 毒婦之阿傳 東京奇聞七編  
 嶋田一郎梅雨日記 五編  
 白菅阿繁顛末三編  
 坂東彦三倭一流三編  
 澤村田之助曙草紙 五編  
 幻阿竹尊聞書 三編  
 川上行義復讐奇談 二編

色吉原味系袖襦 三冊  
 東京小開 花岡奇縁譚 三編  
 横濱小葉 御所櫻梅松録 十五編  
 昇平 府腰栗毛 三編  
 鼓腹 新板物不教浄心  
 編輯人 岡本勘造  
 出版人 綱島龜吉

つぎ 岡本起泉の「毒婦之阿傳」の挿絵。右の袋は「阿竹尊聞書」の袋である。左の袋は「川上行義復讐奇談」の袋である。中央の袋は「嶋田一郎梅雨日記」の袋である。右の袋は「白菅阿繁顛末」の袋である。左の袋は「坂東彦三倭一流」の袋である。中央の袋は「澤村田之助曙草紙」の袋である。右の袋は「幻阿竹尊聞書」の袋である。左の袋は「川上行義復讐奇談」の袋である。

○お徳お徳に  
 ○お徳お徳に  
 ○お徳お徳に





通天橋

上

上 通天橋ありて最難し二個ハ都方  
 と巡りよれ程の家小あすひ年の  
 喰ひさどてて遠う小腕の香を向く小耳  
 海りて自然海世とさけむ地へさむ  
 七も美生の等と板世とさむく首と打揚りて  
 細布やさ布引の麻さすらち迎む  
 面は布も長ちり一首やささるめめと  
 夏換下つて華とさるて  
 布引のさる糸をさ標つて  
 漆うへへる腕のさむ  
 漆二個ハ布引のさる



通天橋

さる

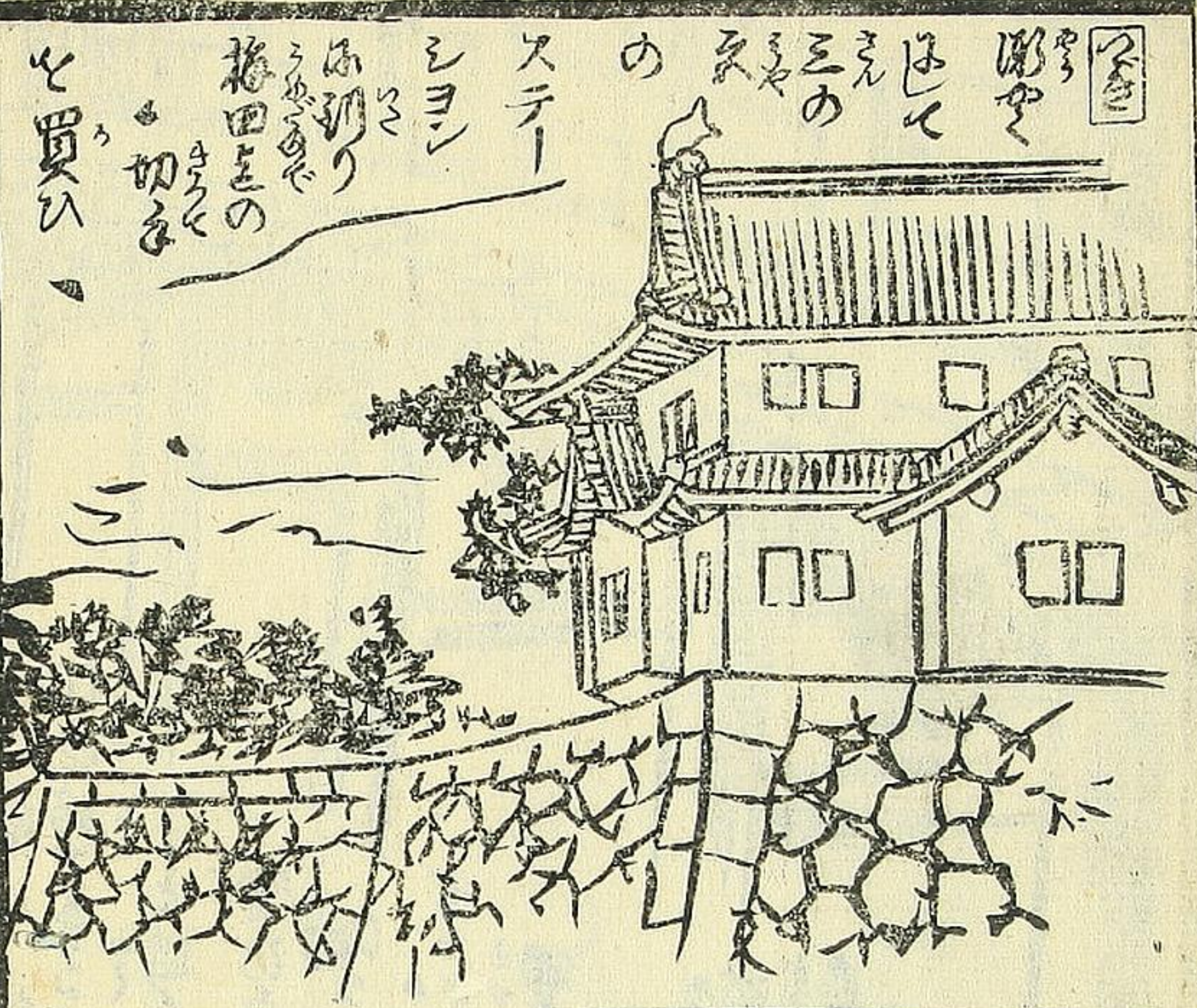
さる

さる

さる

さる

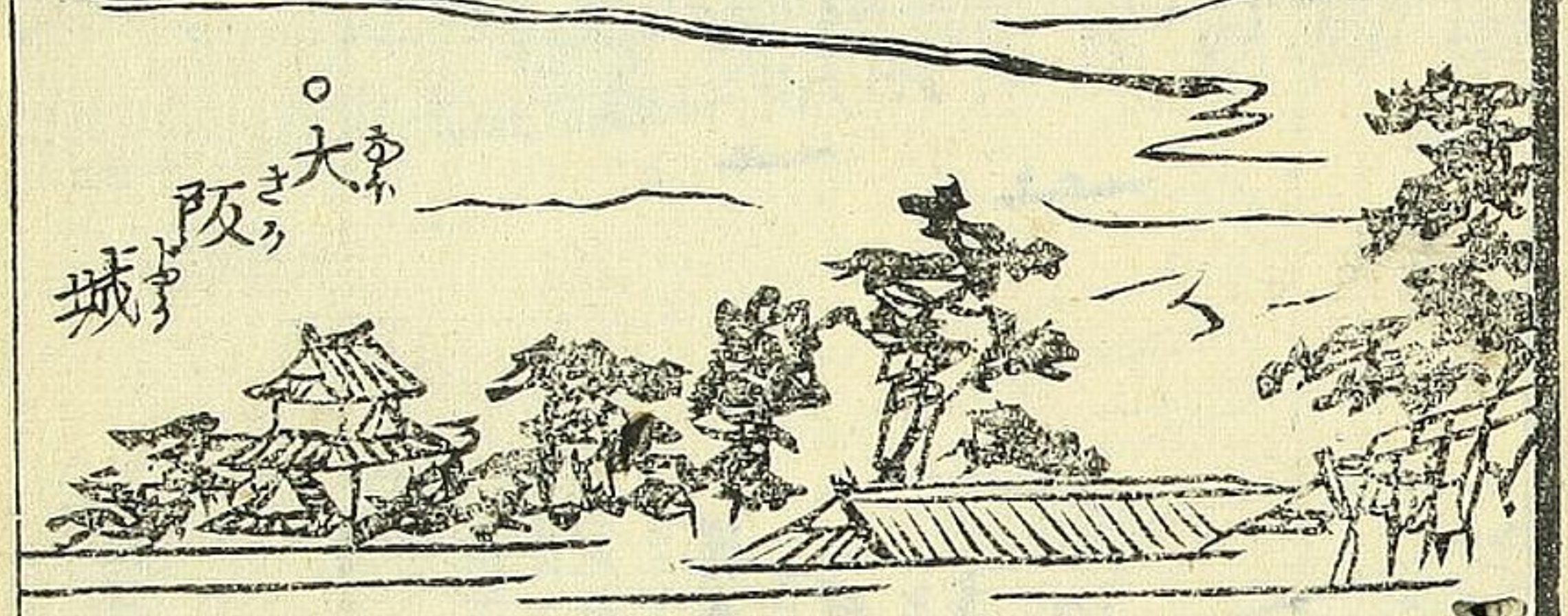
通天橋



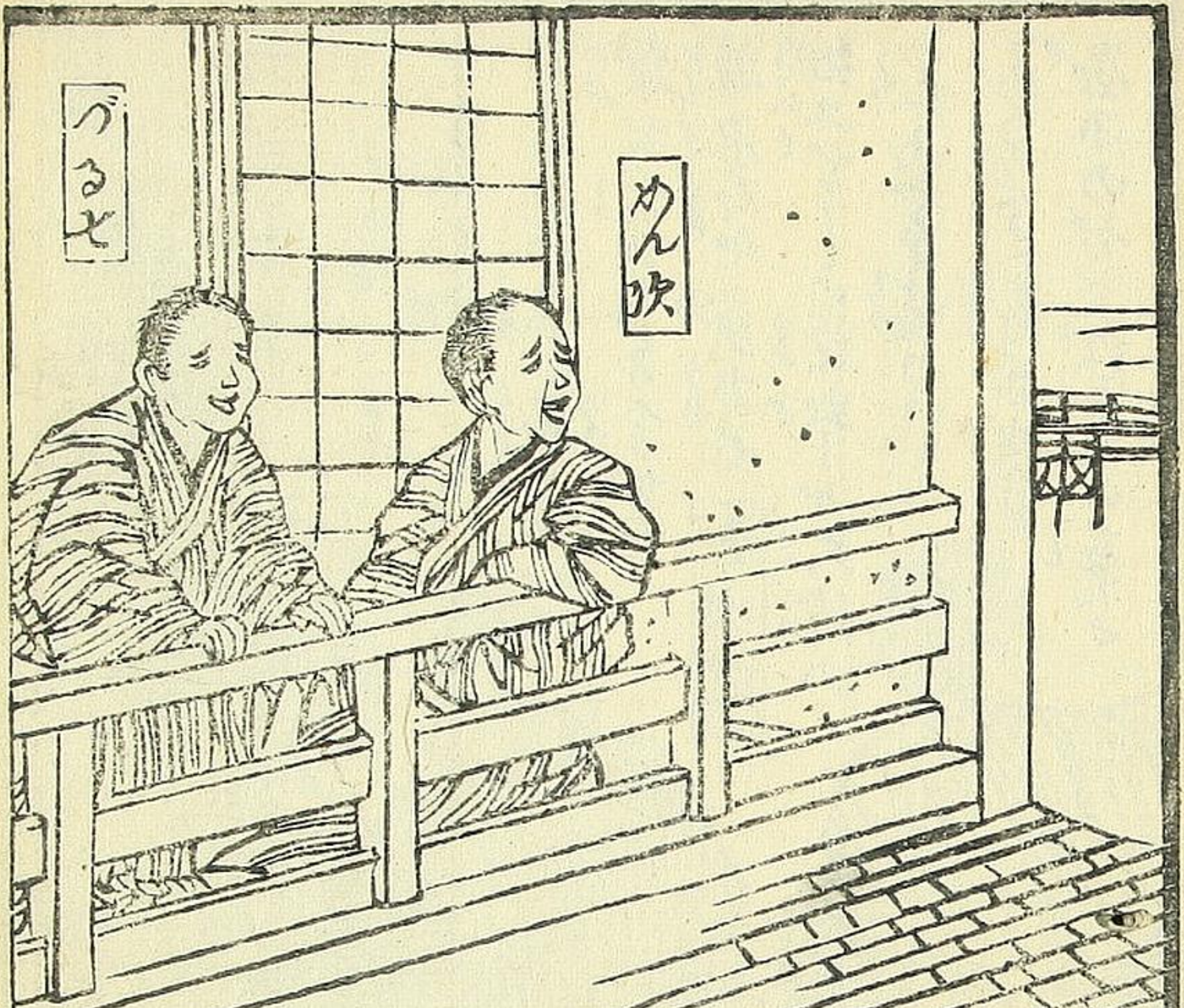
影を  
 ほて  
 三の  
 三の  
 の  
 ステ  
 シヨ  
 梅田の  
 切  
 と買

一、ふれが西京へ出る所は六  
 津戸へ下りあり此處にて  
 二個の阪車より出づ此の  
 新地と横きりて本橋の  
 係り親波橋と打つる  
 小浜の四方築地と有  
 なる竹志とあるに  
 宿とありぬ折も築地と  
 あり小浜と今橋より  
 橋のありあり築地と  
 新地と多くいふ築地  
 不持合築地の如く築地

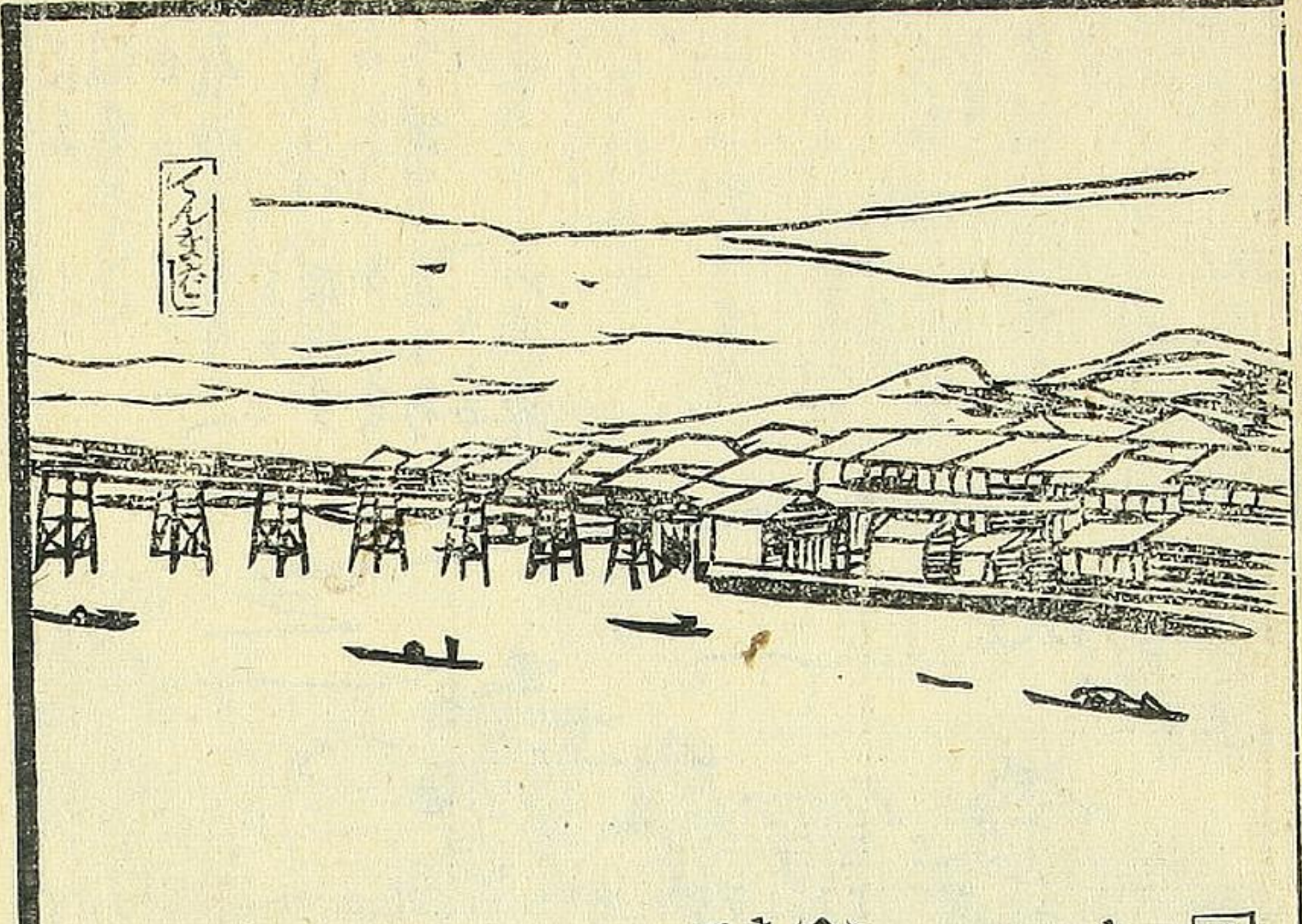
彼を  
 車  
 下  
 の  
 車  
 射  
 の  
 大  
 の  
 城



あり此所あり竹志とある  
 りのハ第一等の築地は七  
 家の猪橋ハ先之橋造り向付  
 の築地よりハ文川と橋と天  
 心見晴し眺むる築地と有  
 なる築地とあり坂井の橋  
 築地とあり二個の道り額一たる  
 出島の敷くを彼井町橋の築地  
 多橋伏舎へ持ゆる築地と有  
 築地と有築地の心と有築地  
 築地と有築地の心と有築地



の如きとあるとる  
る程うらやま  
がさくねと  
氏の電も煙り  
も元えうらや  
金作東家の  
駿河と春あ  
さう氏をうら  
う華族の煙も  
ふりうと一  
か副都アハ  
今うう人氏  
の可答が次へ



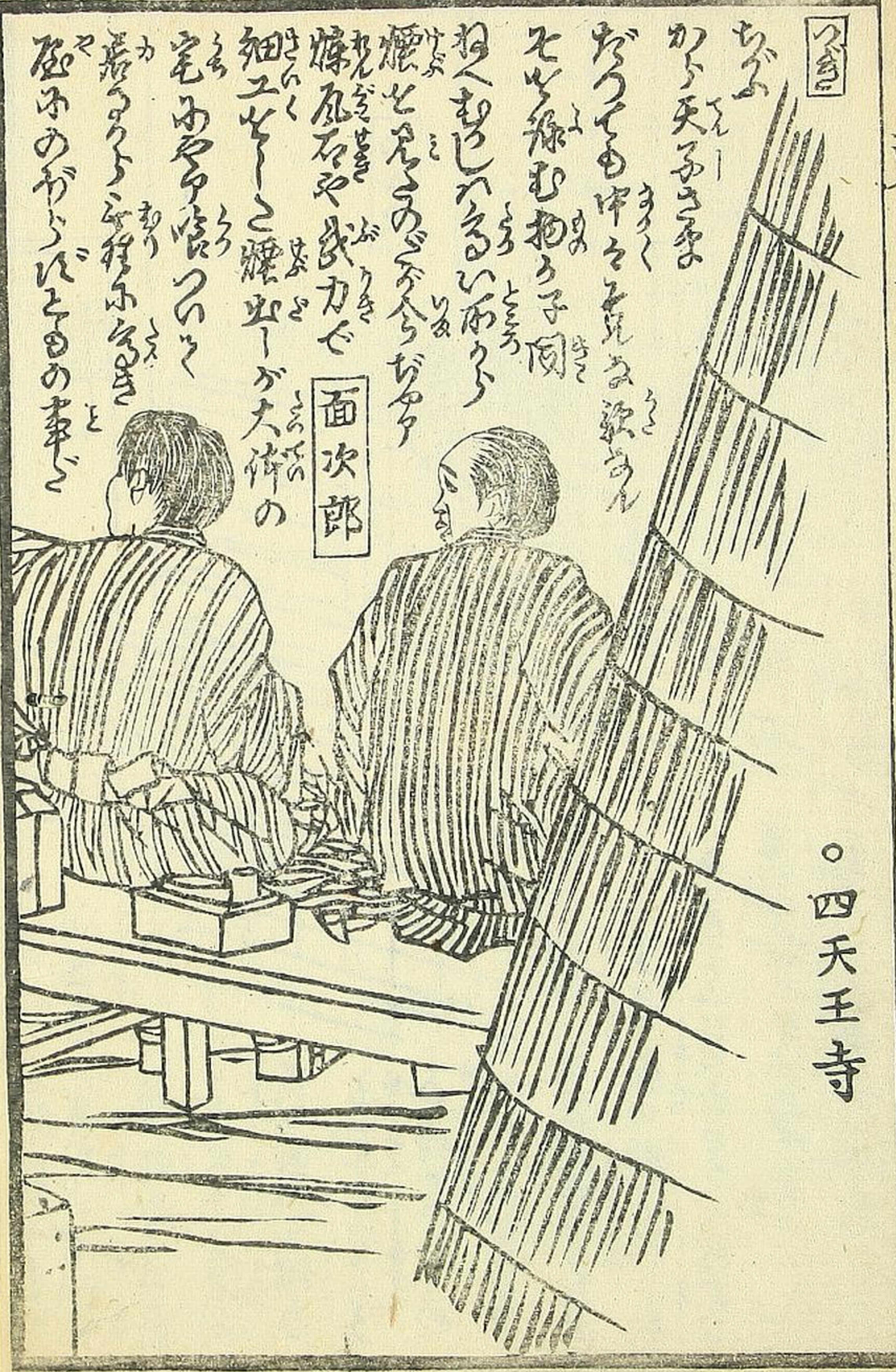
つぎ 同う及異形の花  
ちうねと色由智  
あゆ成るど一  
知せふ先按心  
兄おさんとま  
梅の文と網  
舟お渡巡り  
まう次の田  
いつり可うく  
の西の船  
アと兄ま  
とん橋の以

和  
三

和  
三



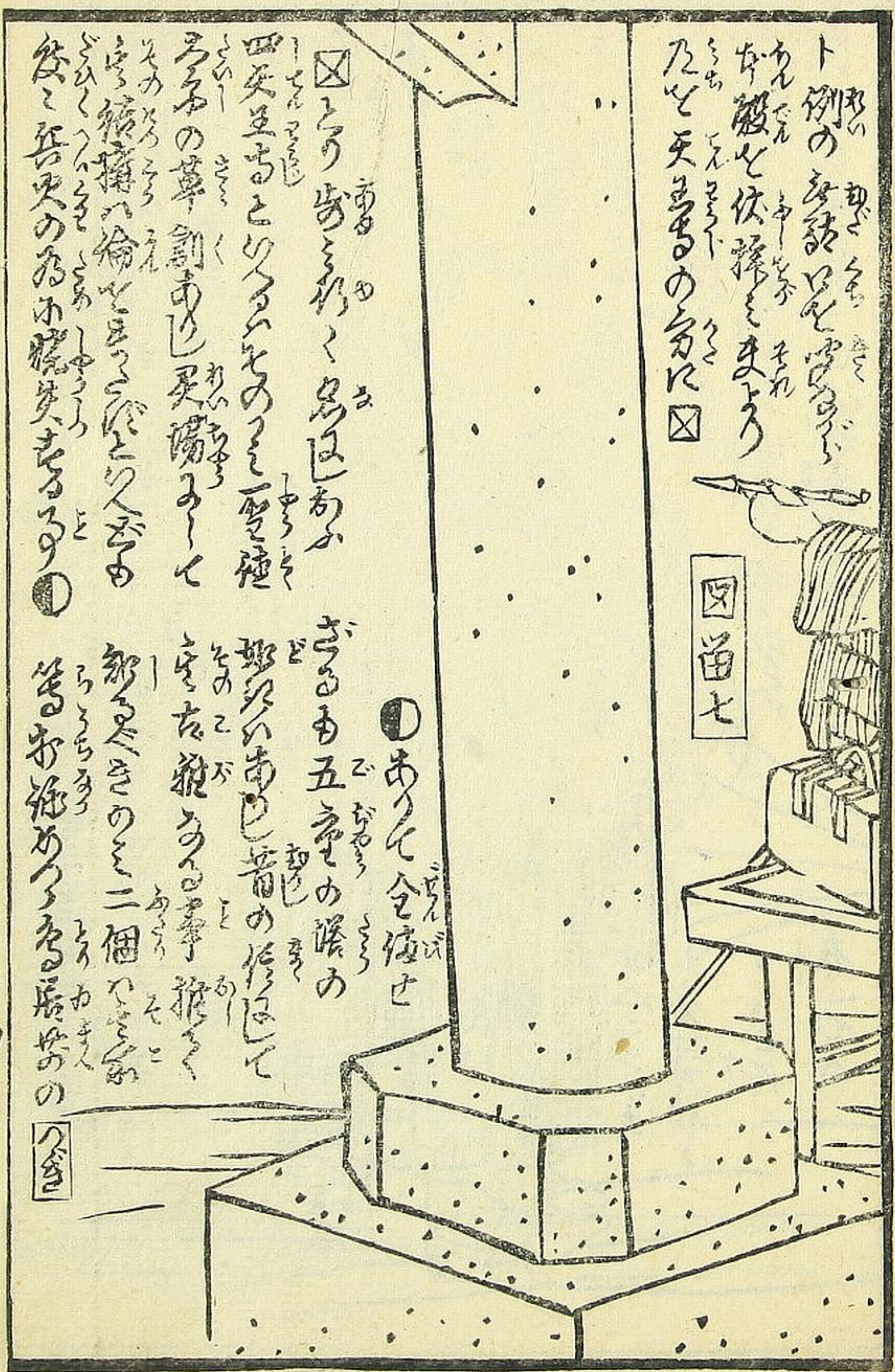
○四天王寺



つぎ  
 かつ天の子さま  
 だつても申さるる見なれん  
 そと縁むおろ子同  
 想むじのるいあり  
 煙とるるのさかちり  
 藤丸石や成力也  
 細工とて煙出か大佛の  
 宅内や喰つる  
 藤丸石や成力也  
 煙とるるのさかちり  
 細工とて煙出か大佛の  
 宅内や喰つる  
 藤丸石や成力也  
 煙とるるのさかちり  
 細工とて煙出か大佛の  
 宅内や喰つる

面次郎

四苗七



ト例のな話いを  
 藤丸石や成力也  
 煙とるるのさかちり  
 細工とて煙出か大佛の  
 宅内や喰つる  
 藤丸石や成力也  
 煙とるるのさかちり  
 細工とて煙出か大佛の  
 宅内や喰つる

あつて全極止  
 五の藤丸  
 藤丸石や成力也  
 煙とるるのさかちり  
 細工とて煙出か大佛の  
 宅内や喰つる

つぎ



つぎ 酒肴より二個の  
考へ 味しむんとすれど  
おとほ

おれかみちとて  
あつて 面まん  
おろか 小付ち  
あつて ちが  
あつて ちが

何と一音うん  
たつて ちが

光景人の金

そのまゝすど  
会へ 生伝ま  
とちか 備ゆ

あつて ちが  
あつて ちが

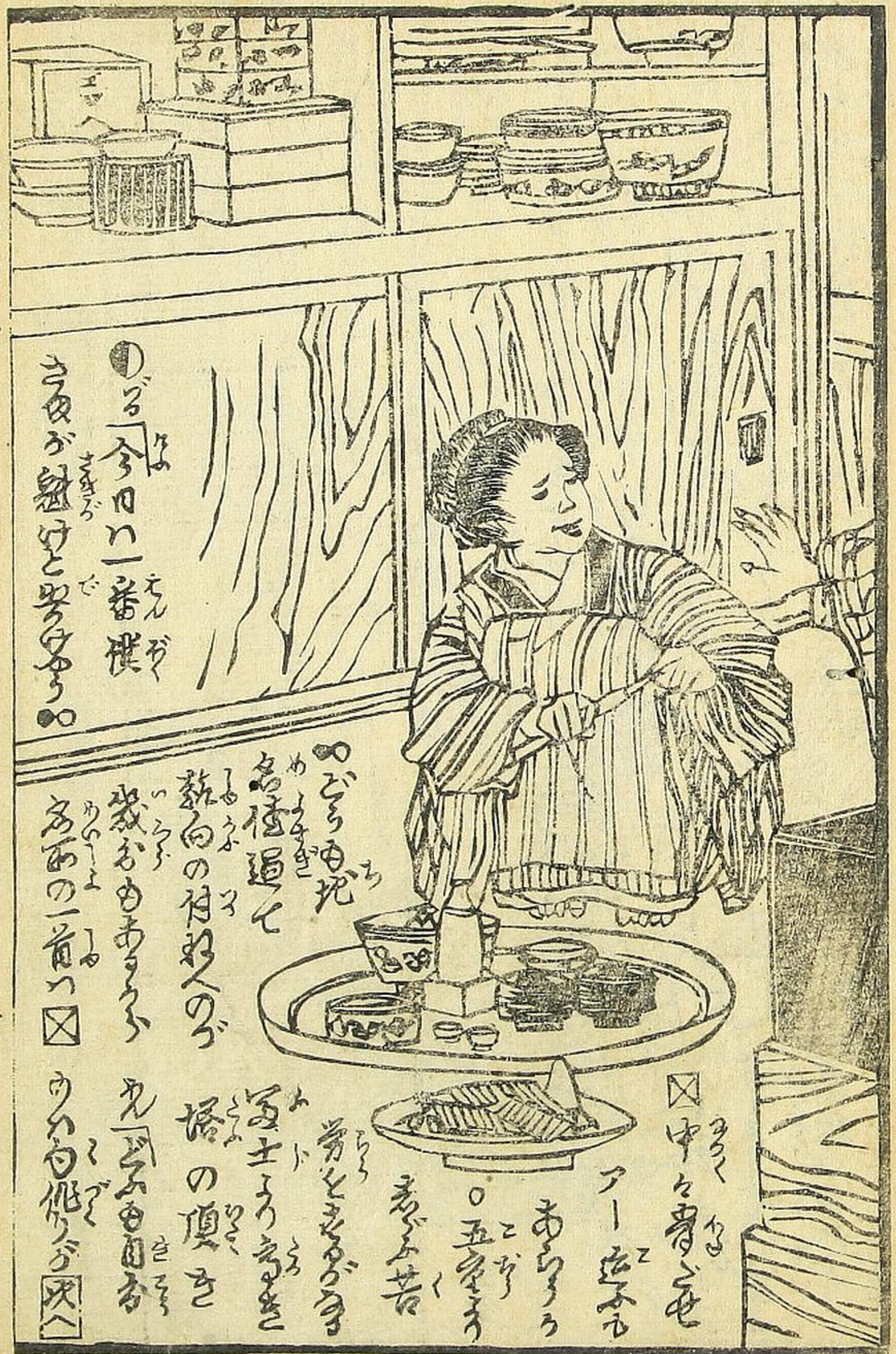


今日の一番  
さぬが 魁けと 聖さ

おぼやち  
おぼやち  
おぼやち

おぼやち  
おぼやち  
おぼやち

おぼやち  
おぼやち  
おぼやち





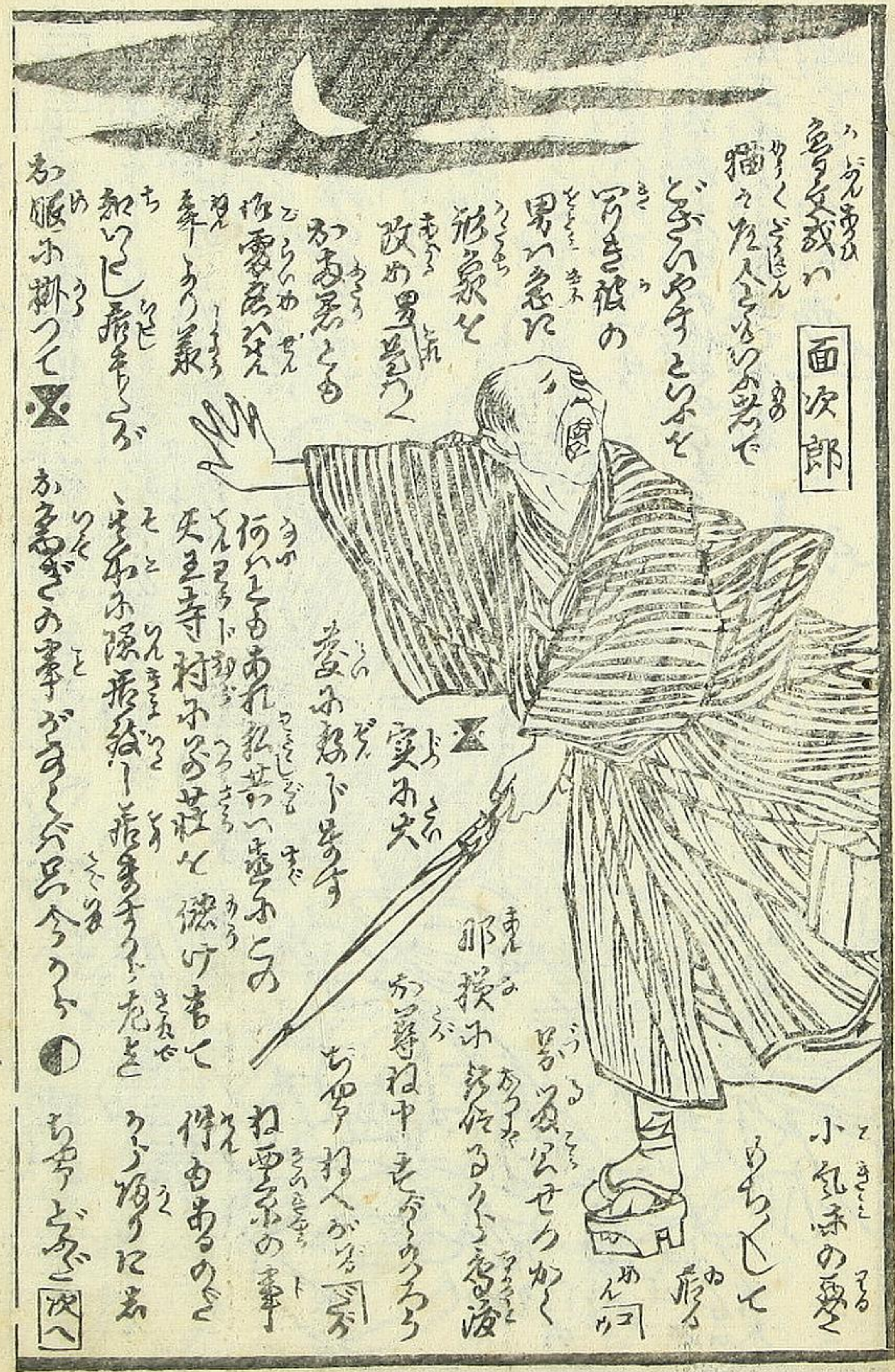


いっほ  
勢同社長  
假名垣

因田七

おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます

おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます



面次郎

おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます

おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます  
おまかせを頼みます

男三才のあやうきあやうき  
あやうきあやうきあやうきあやうき  
あやうきあやうきあやうきあやうき  
あやうきあやうきあやうきあやうき

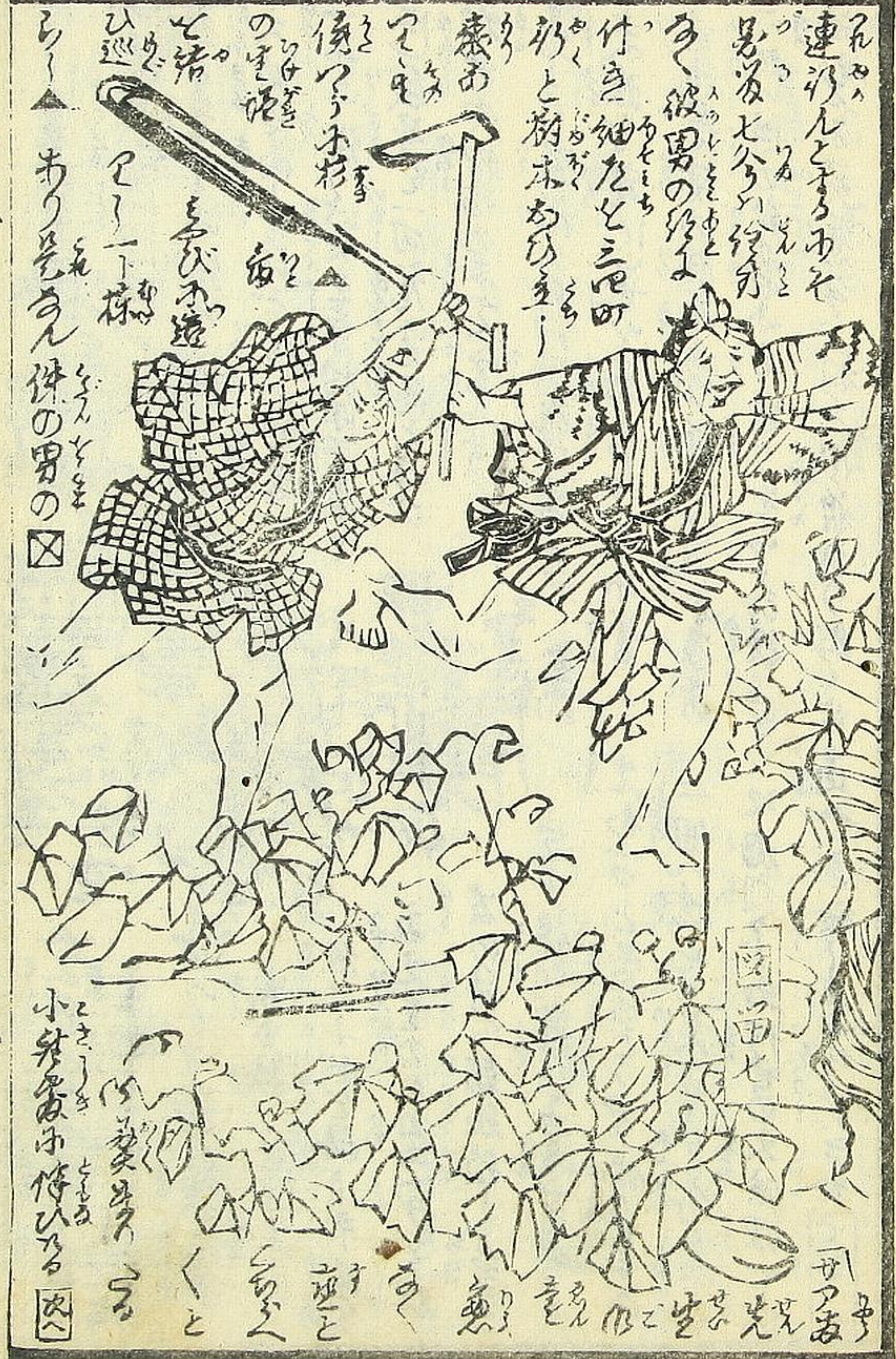


面次郎

別荘のあやうき

一丁

男三才のあやうきあやうき  
あやうきあやうきあやうきあやうき  
あやうきあやうきあやうきあやうき  
あやうきあやうきあやうきあやうき



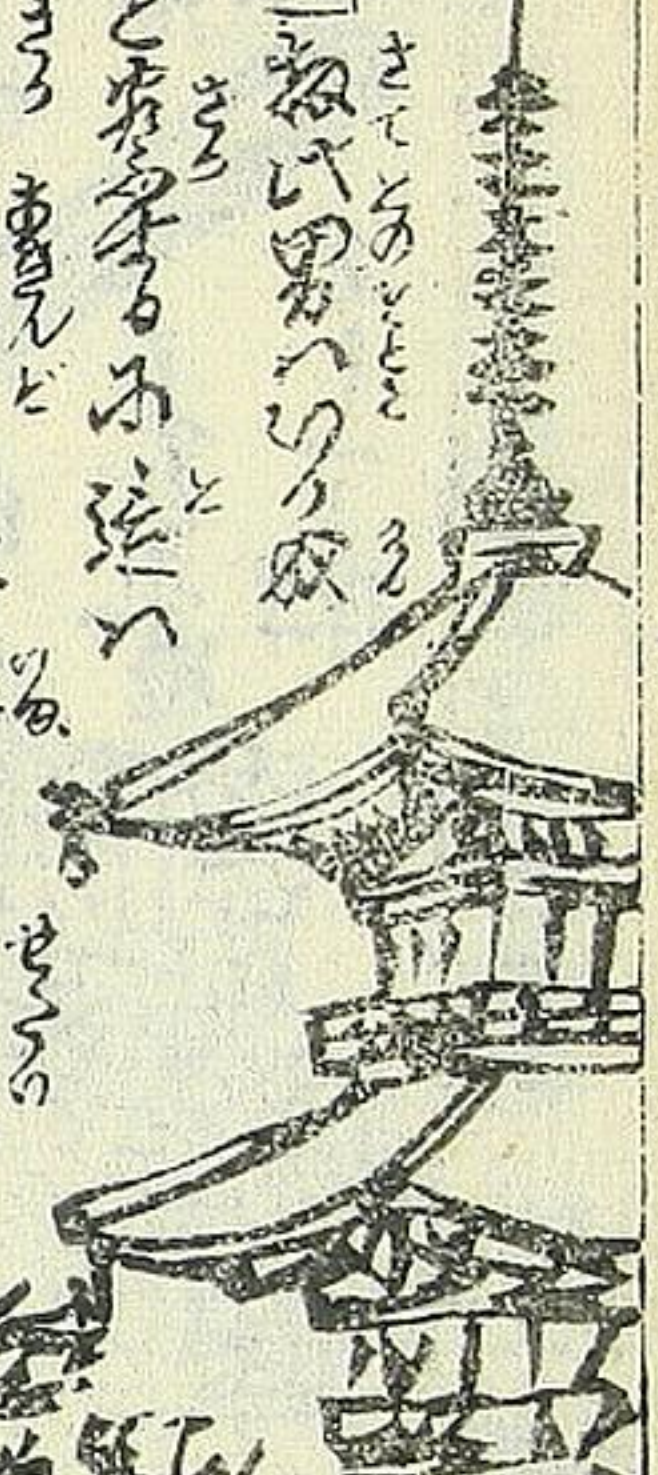
小針

五木三二

芳川春傳岡本起泉綴

|             |           |             |                      |           |                       |                       |
|-------------|-----------|-------------|----------------------|-----------|-----------------------|-----------------------|
| 川上行義復警奇談 二編 | 幻阿竹尊聞書 三編 | 澤村田之助曙草紙 五編 | 坂東彦三倭一流 三編           | 白曾阿繁顛末 三編 | 嶋田一郎梅雨日記 五編           | 其名も高橋 東京奇聞七編<br>毒婦之阿傳 |
| 出版人 綱島龜吉    | 編輯人 岡本勘造  | 新板物不殺淨心     | 界平 府藤栗毛 三編<br>松村 藤原作 | 御所櫻梅松録 十編 | 東京小間 花岡奇縁譚 三編<br>横濱 薫 | 色吉原味系符禱 三冊            |

若と春のふゆの...  
 大坂の商人多れど今の世態と  
 一ふゆ傷つて天を穿つ村は陰夜と  
 色紙号と一河内は花とゆび  
 狂言や狂言の素人宿直ふれど  
 春のうら若後ふれど風流才ふと  
 交際を後世に世に花をともふ者  
 夜も春の鏡の隠居より二つ小面はあつた  
 二個の侍の縁後ふれど通つてをさすの夜ふと  
 縁むふふ不気味なるおと風流より知くさる由  
 三編



三種四種の者七軍火  
 葉烟草を食ふと所  
 つまふれ後と夜  
 飯由飯一平が兄と  
 故小助と故一平は  
 友先生のおおのり  
 友の侍の報知後一重  
 三編

松齋吟光画

栗ヶ色編  
大尾

下





こ 扇

ひさくら

まじ之篇

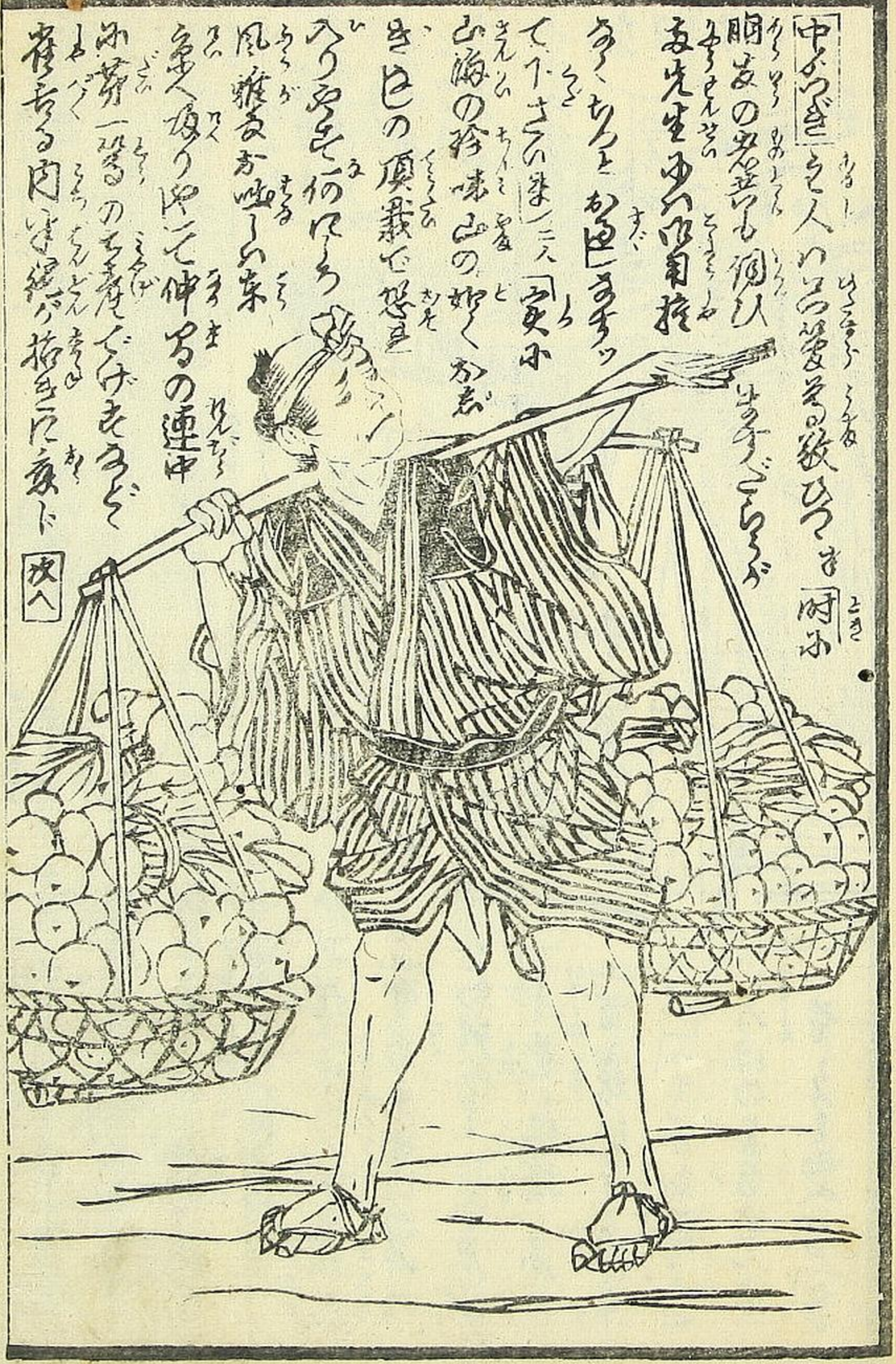
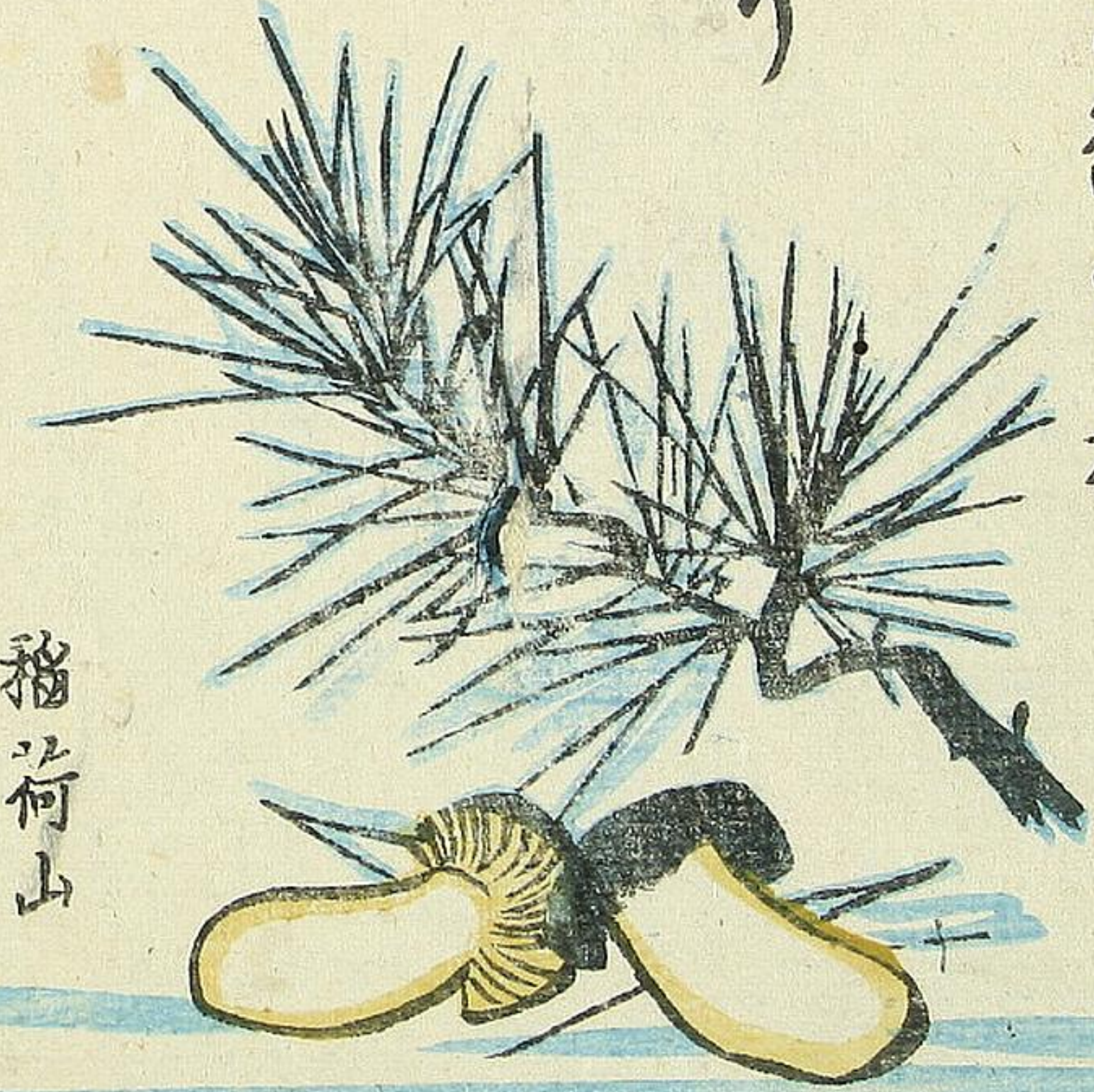
下の巻

標 百化

中 光点

扇半様

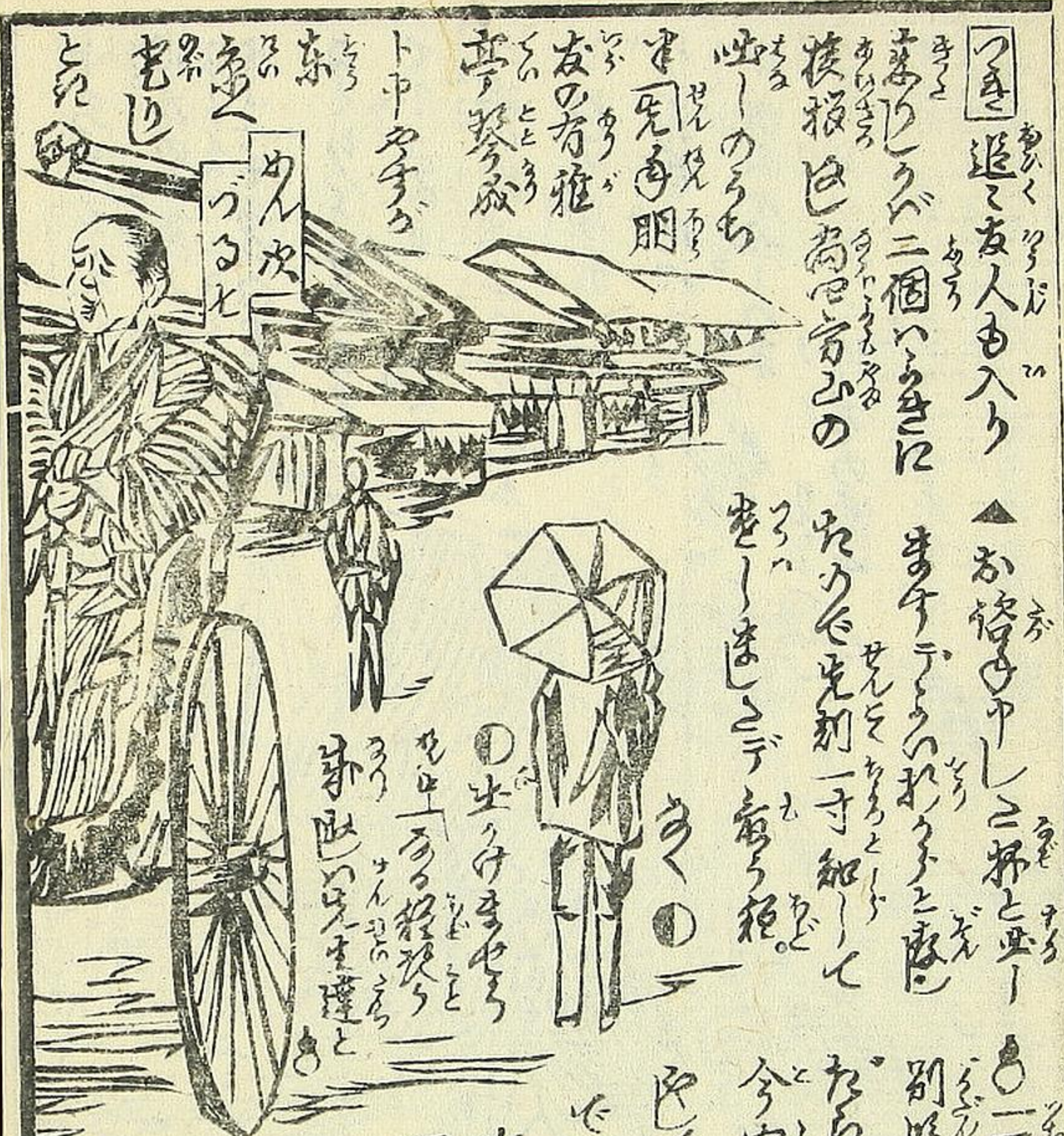
稲荷山



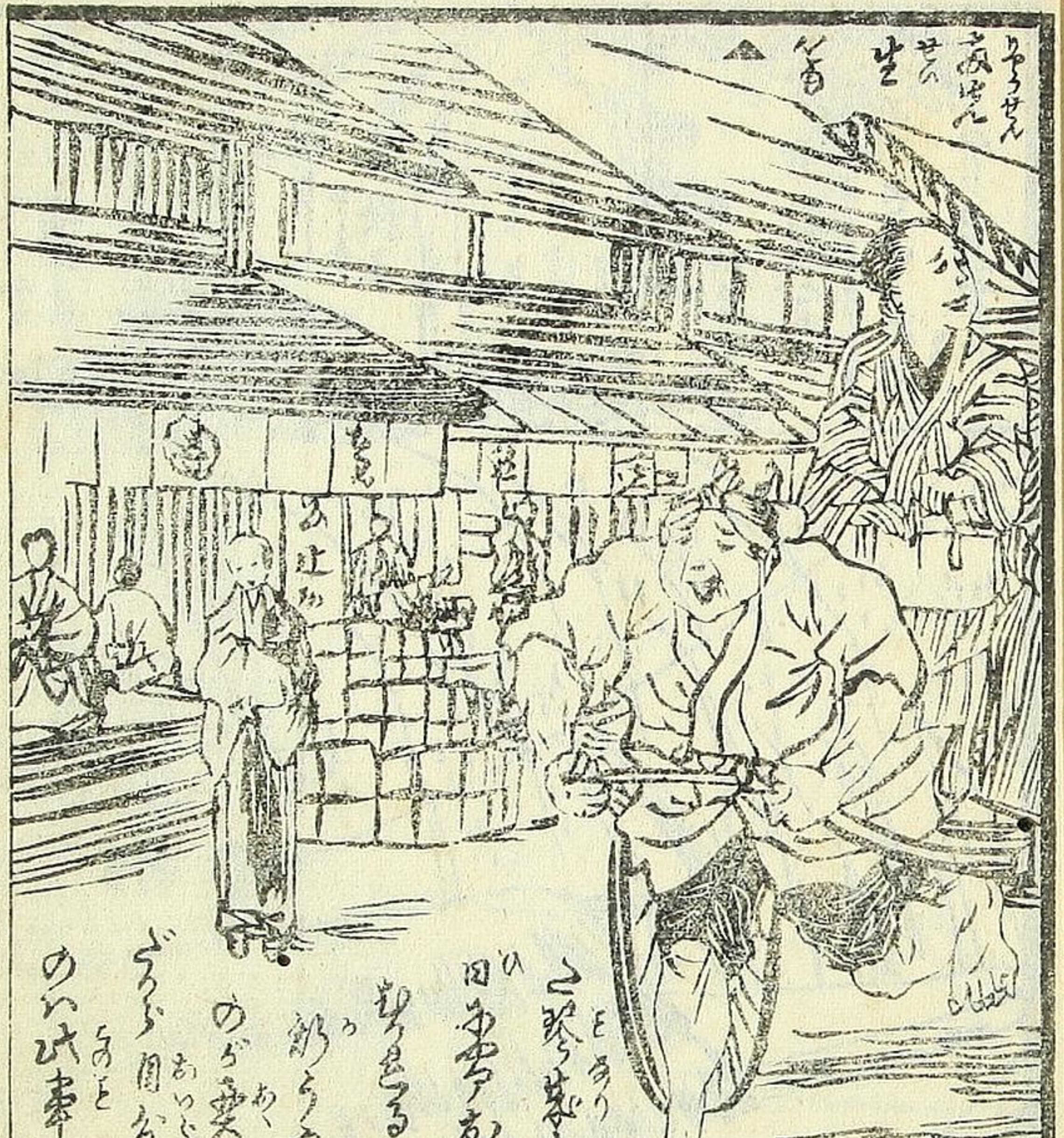
中の巻... 友人の男... 五先生... 多... 下... 山海の... 此... 風... 多... 所... 存...

東三下

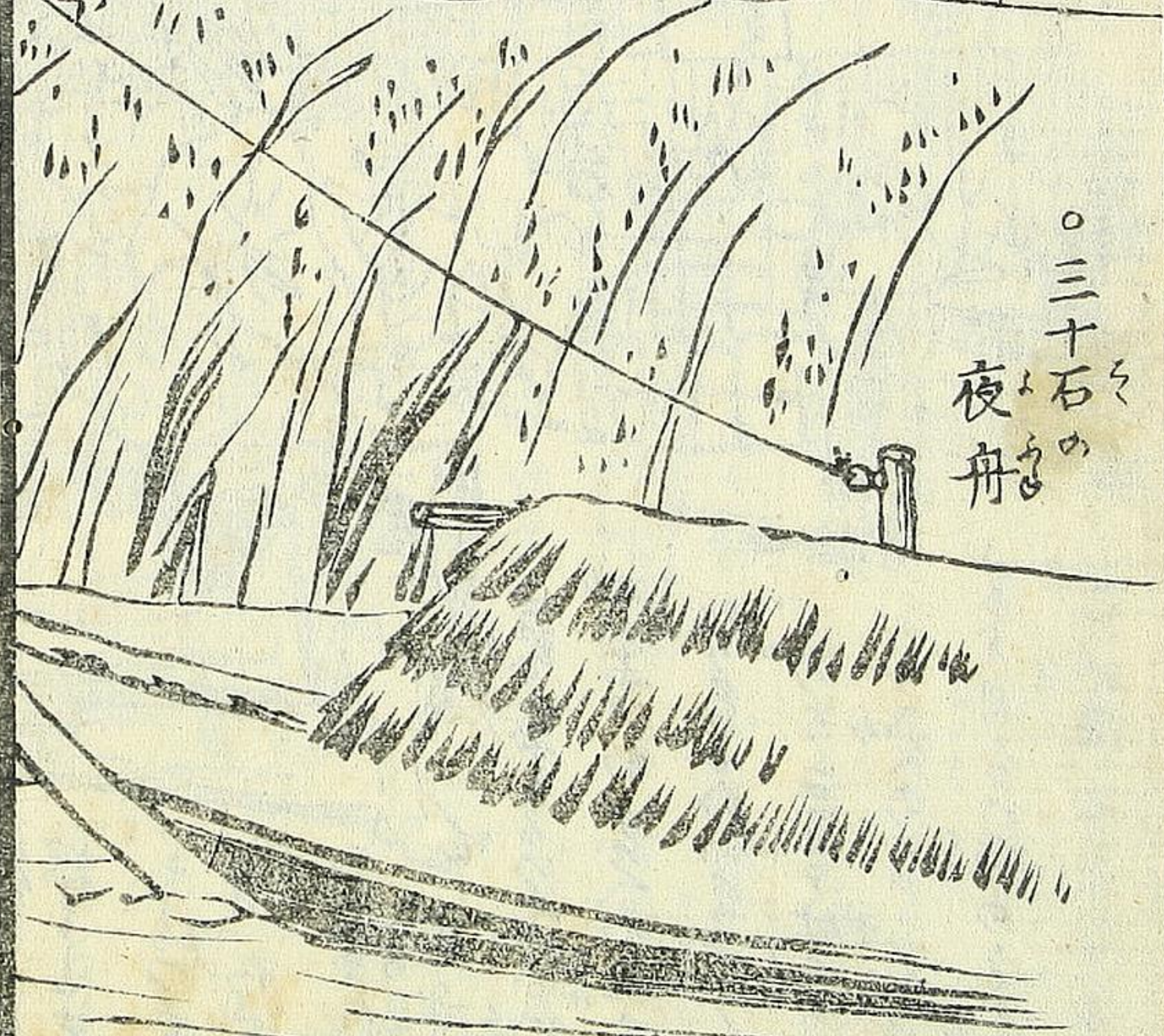
次へ



つぎ 退く友人も入り ▲お格好中し之杯と云一  
 一面鏡の多うもあねら又  
 別は別世にねふ小娘も今  
 ならうね「お族く保一  
 今宵の月の影おにさへ  
 して珠の雲の音由感振  
 せがすあ光世の心影吟  
 とおれは中しそのの  
 「い」是の猿橋らふの  
 一首寂ひさう海平  
 丸「ハイ承知致し之  
 いろはの巻あさんも  
 一首うらとあへる」



あつと耳をさね  
 丸「何ぞくづ」あ  
 おあねらか「おまの  
 為承やろ交承を  
 田中あかへふ化のほとひん  
 びらさるのいさつてくゝるごまモウ  
 ねらまりや仕官がねへ倒る  
 のが要のま上分あたらう  
 づらう月分の暗ゆるら止ねといふ  
 のいけ事サと巻あ七六調りに因



● 是れと  
突つ子  
二個ハ  
陶も  
落付  
粘と  
遊  
はしと  
ハ  
附  
尺あり



△ 舟  
小  
儀  
料紙ハ

丸  
向  
此  
程  
出  
奏  
浪  
九  
づ  
ち  
か  
か

つぎ 波を渡り 徳利の後の残り酒

ちりやんと めん次

多経の松を

皆アツクこれハ

赤砂真赤

数吟被し

未之見

流石後れの

天の口側で赤面赤

是阿比孫君の名也

お家の中しこいぶ藤と深

又ゆかりやすうら今晚ハ



つる七

めん次

やせうといふとき次の写はて

下女の飯湯が旦那様をきか

して今晚ハ引下り

お暇といはや

せつま

咲ハ

とも

入ッまへはまこま

け者へか通しやまヤレくやうと

まの未と先生とあて

とわが本先ハ



四一

あすつて中さのま

まの再び何い

お久志おとあろけ

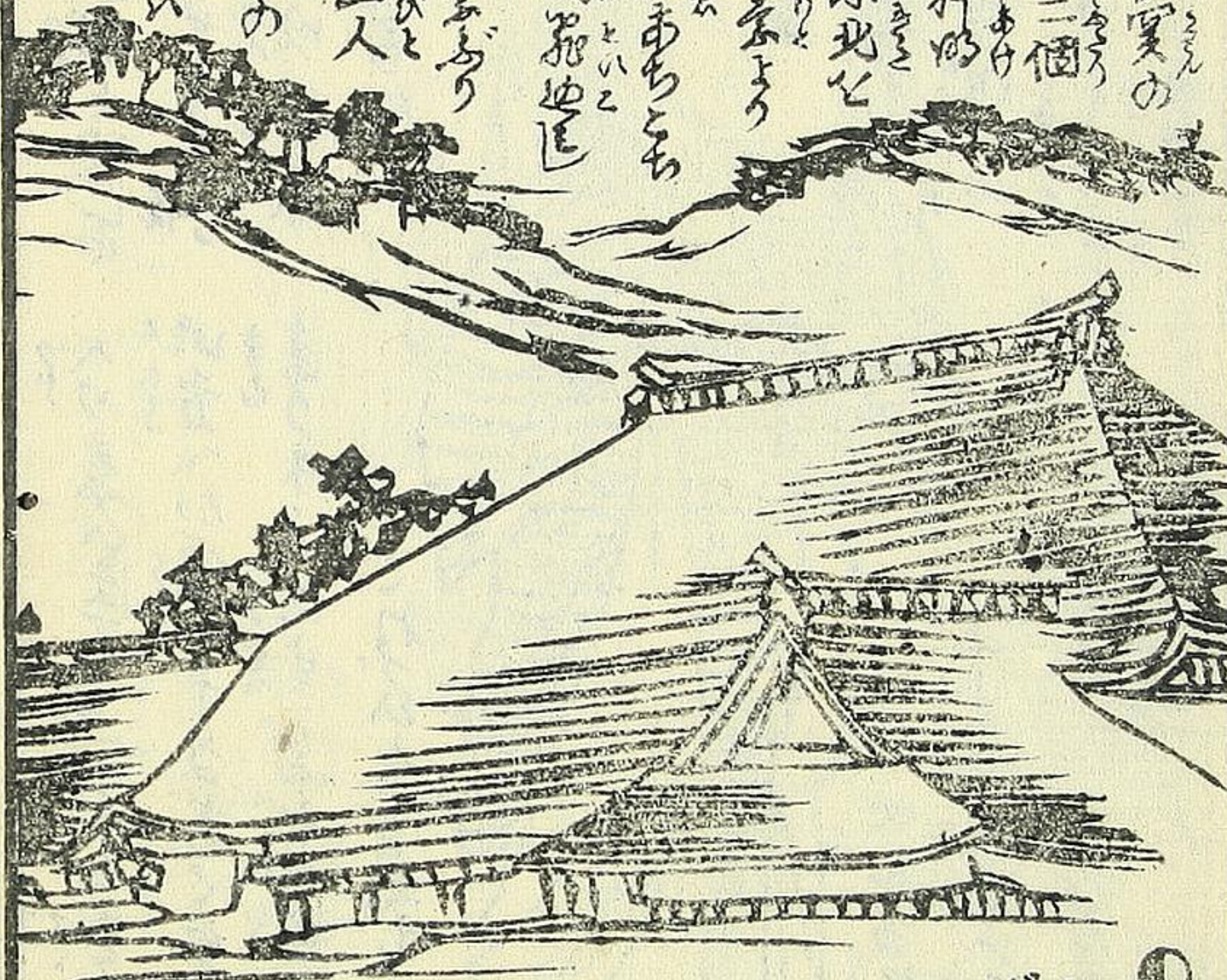
と

があつとく

と

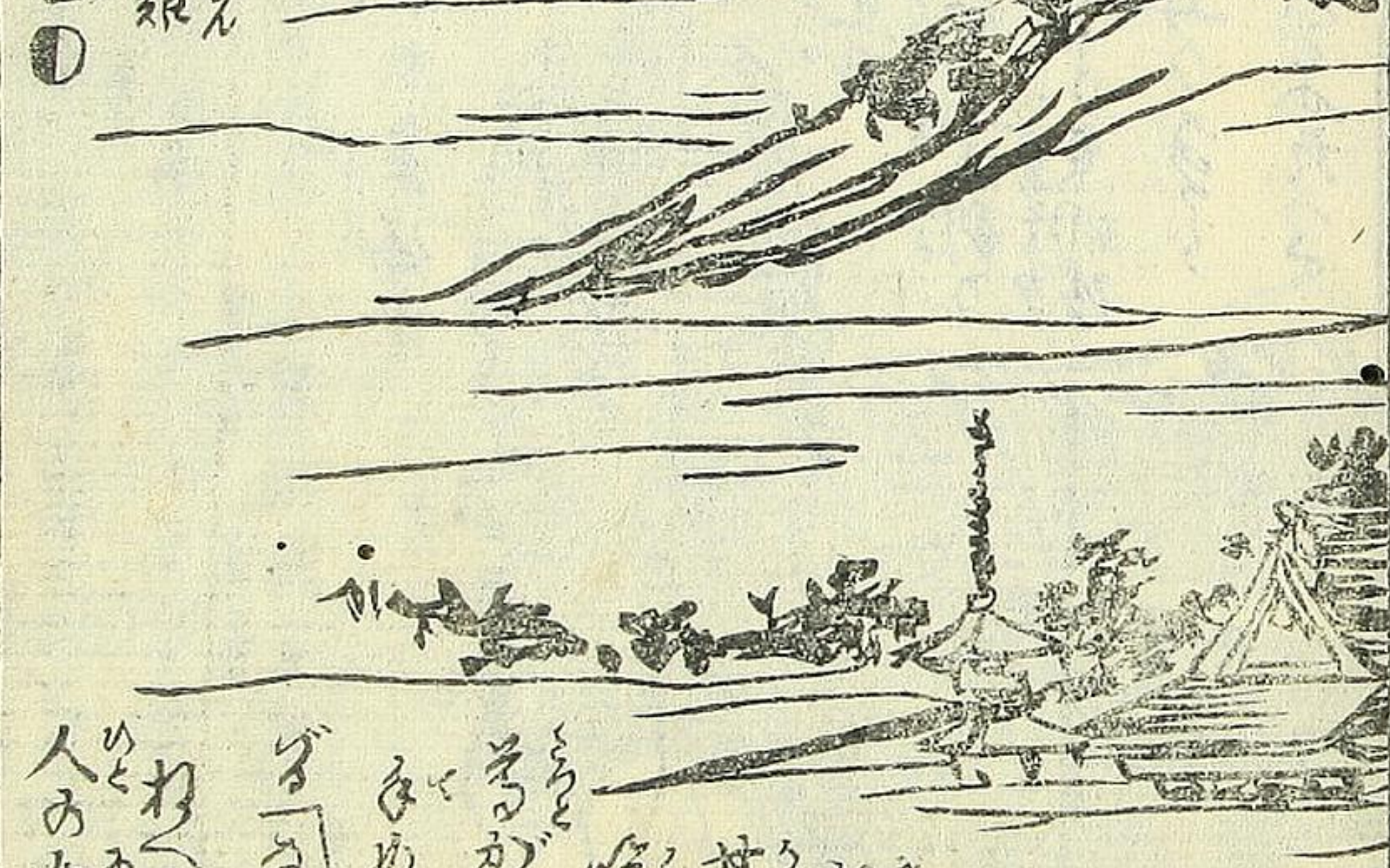
つる 七の 咲の とも

〇接指もせぬ雲霞の  
 方へ近出でせ候二個  
 へ階り門の戸を神の  
 月の光りともあらず  
 きてて道出するまよ  
 なる不素河ま放あち  
 階へ迷ひ此の細へお地  
 小畑の二個の妻あり  
 の懐きさど風盗人  
 と名あひはれ申志の  
 竹原隈吹あまむ  
 又八次四人と八方



〇控つて四半の面の  
 波かいた子夜あやむ  
 階へは籠る吐しど  
 〇あひまきあや  
 ねせぬめく  
 昨日のねむい筋  
 女が籠くねと  
 云つこのせおめ  
 がは晴あまな  
 片始末を物味  
 への白痴  
 への傳二年あ

〇権あつたて近  
 事ふれ由遠いゆ  
 階へ二個へ進退  
 谷まじか捕へられ  
 一六事とたれ一どり  
 ぬけおてぬく虎口と  
 階へ遠く小夜とあ  
 階へ各は東天あま  
 階へお難きよと若  
 引階け方階地の名ふ  
 階りる丸アま実に  
 階る物と方と風盗人と



〇不道もねてふ  
 何處でも余のけの  
 仕りをさるせ  
 〇へシへなさる  
 程云でも角分の  
 甘一あのをたふ  
 喰ては生るんぞと  
 〇かたけあつけ一  
 〇あひまきあや  
 ねせぬめく  
 昨日のねむい筋  
 女が籠くねと  
 云つこのせおめ  
 がは晴あまな  
 片始末を物味  
 への白痴  
 への傳二年あ





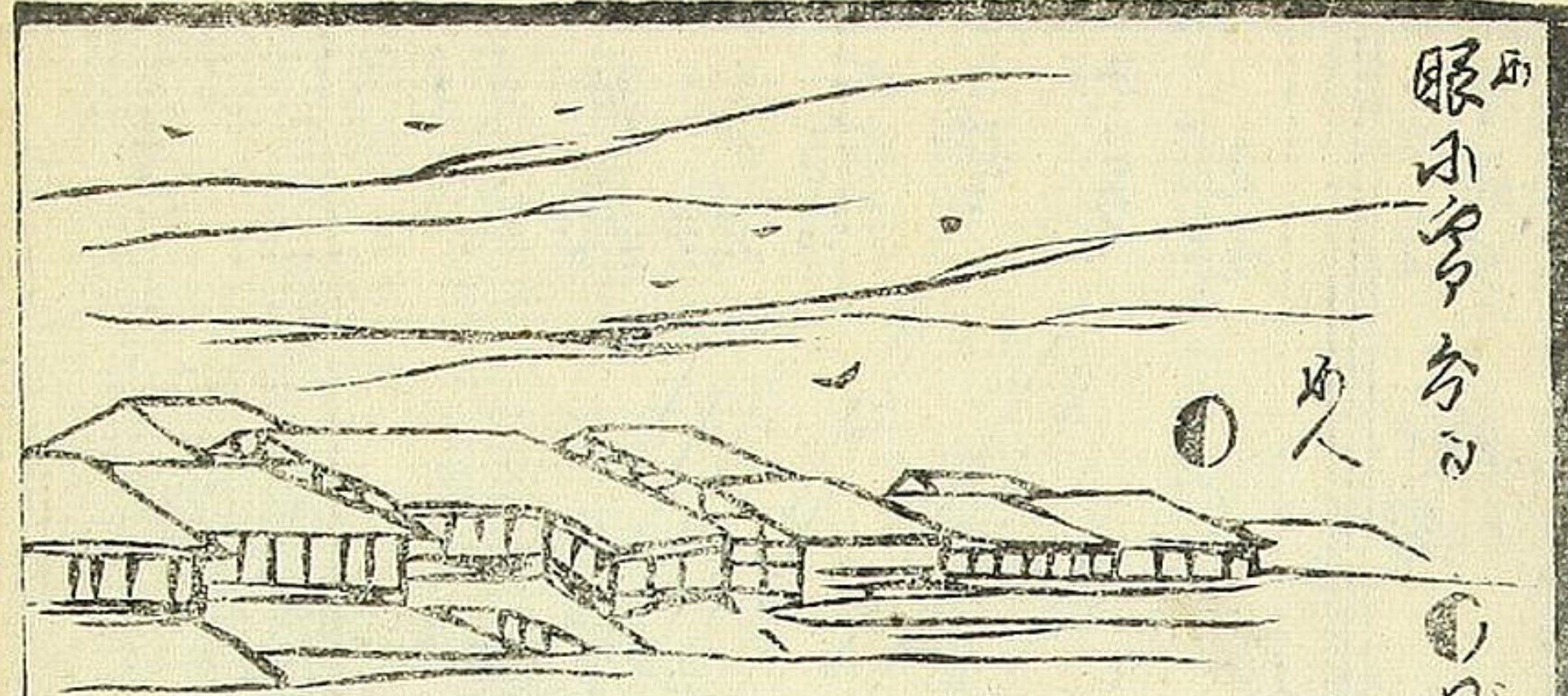
つぎ 経光 経光は前を去ると  
 多岐八が電の何  
 ぐも糸の町はよりり  
 とあふり歩ゆね  
 エ風とあひつき糖子  
 と栗とといふか  
 つい実の感  
 白梅さるま  
 とも何ほし  
 放人の一九が骨  
 とをうごめから



経光 経光は前を去ると  
 とをうごめから  
 放人の一九が骨  
 とも何ほし  
 白梅さるま  
 つい実の感  
 と栗とといふか  
 エ風とあひつき糖子  
 とあふり歩ゆね  
 ぐも糸の町はよりり  
 多岐八が電の何  
 つぎ 経光 経光は前を去ると



つぎまてくから家風後と見做す  
 のどろ天窓と結ぶ  
 ひとあつても冠り  
 の形とまの似て  
 居るのサるどろてもあやしくと  
 ねむねむねむねむ  
 むんのことろて  
 又拵サ  
 ぶどふもをえ  
 ねんやうと  
 ねむねむの



眼小多分の  
 めん  
 何とせんお忍まずふあてて是れねん  
 後生ごうめ 同はあつてはせとやらう  
 寝の拵で拍みありサアアアアアア  
 ぶらゆめへのあやううせやうかつと居る一ト  
 多分同四葉の通りふゆーふまう系小曲り  
 寺町通りと三葉と上り又あま曲り小橋  
 湖の縁店瓢箪屋小舟小橋の流れる  
 上二葉より加藤門の水とせれ入世に取巻とマ  
 水清く名男て是と名取川とよ下流伏見の  
 板橋より鐘小橋川小橋二個のあつてはと  
 女の笑の白いの足踏と恋ふし多るも那蹄りの  
 相後由持多るはふえれく花柳の廓小橋由





帰りの粉

川

其名も高橋 毒婦之阿傳 東京奇聞 七編 色吉原味系符禱 三冊

御所櫻梅松録 十編 新板物不殺淨心 編輯人 岡本勘造 出版人 綱島龜吉

|             |           |             |            |           |             |          |            |           |          |
|-------------|-----------|-------------|------------|-----------|-------------|----------|------------|-----------|----------|
| 川上行義復雙奇談 二編 | 幻阿竹尊聞書 三編 | 澤村田之助曙草紙 五編 | 坂東彦三倭一流 三編 | 白菅阿繁顛末 三編 | 嶋田一郎梅雨日記 五編 | 東京奇聞 七編  | 色吉原味系符禱 三冊 | 御所櫻梅松録 十編 | 新板物不殺淨心  |
| 編輯人 綱島勘造    | 編輯人 岡本勘造  | 編輯人 岡本勘造    | 編輯人 岡本勘造   | 編輯人 岡本勘造  | 編輯人 岡本勘造    | 編輯人 岡本勘造 | 編輯人 岡本勘造   | 編輯人 岡本勘造  | 編輯人 岡本勘造 |
| 出版人 綱島龜吉    | 出版人 綱島勘造  | 出版人 岡本勘造    | 出版人 岡本勘造   | 出版人 岡本勘造  | 出版人 岡本勘造    | 出版人 岡本勘造 | 出版人 岡本勘造   | 出版人 岡本勘造  | 出版人 岡本勘造 |

御南編町丁目一番地 浅草丸町十六番地 明治十一年 編輯人 松村春捕 出版人 綱島龜吉

櫻雨作吟光画

其名も高橋 毒婦之阿傳 東京奇聞 七編 色吉原味系符禱 三冊

010190525142

